長
秋
田
著
文
祿
堂
發
行

長田秋濤君著

新刊

新々赤毛布

明治
27 3 9
交内

大日本書肆　文祿堂壽梓

目次

日本の貴族マドロスとなる……一
國賊李華昌……三
歸化露人チーフンタイ……四
治安妨害の聲……五
露西亞の雪隱……六
不潔人種の證據……七
滑稽なる筆談と物眞似……八
大便と小便……一〇
韓語中の外國語……一二
露國の裁判……一三
韓人と猿……一四
川上大將荒膽を挫かる……一六
馬鹿河豚……一八

一攫萬億金獏河の金山……二〇
助けてやるが何程出す……二三
露人は泣き虫也……二四
巡査の買收競爭……二五
喧嘩は見て居る奴が惡い……二六
だから日本人は困る……二七
近衛公の四ッ匍ひ……二八
井上雅二一年にして豪傑となる……二九
奥村五百子と驢馬……三〇
小越平陸の味噌汁……三一
小川金三郎の英語教授……三二
中野熊五郎の無邪氣……三三
放蕩息子の治療……三四
千金丹は旅行用の菓子……三五

四月一日……三六
日本は米の無い國……三八
朝鮮人の呑氣さ加減……四〇
在韓西洋人の朝鮮化……四一
荒尾精の逸事……四三
山口五郎太の手品……四四
千葉久之助の匍ひ逃げ……四六
山田良政の行衛……四七
秋山運次郎の歸鄕嘆……五〇
支那婦人の自殺手段と其目的……五〇
杏花村に五文の貸付……五三
田中侍郎の戰利品……五四
鈴木天眼の御經文……五六
南爪の仇討……五七

宮川五郎三郎の石炭……五九
宮崎滔天仙人と爲る……六〇
朝鮮第一の大釜……六三
三年間死人を柿の木に吊す……六四
半夜鷄を聽て牛の活血を啜る……六四
井上藤三の手柄……六五
橋險の强盜……六八
本間九介の速答……七一
密航婦の横奪……七三
運吉の强膽……七八
日本流の露語……八一
支那人の露語……八四
人良ト一月月山山……八六
呑氣なる强盜呑氣なる捕虜……八七

田中侍郎の一喝……八九
平山周命乞ひさる……九三
岩崎鐵彦輝を盜まる……九六
罰金の抵當に古帽子一つ……九七
醜業婦と仕切られ……一〇〇
日本人の資本主……一〇三
仕切られの勢力……一〇五
貝加爾湖中の幽靈魚……一〇
孫逸仙の日本語……一一
菊地軍三郎の投げ賃……一一三
安永東之助の健筆……一一五
山崎羔三郎の風呂入り……一一四
國を取る商法……一一六
丸橋女醫の投藥……一一七

西村天囚耳を剪らる……一二八
上野秣翁の露語と俳句……一二〇
關屋斧太郎の鶴打ち……一二一
骨折り損の草臥儲け……一二三
歯磨粉の妙藥……一二五
澳門の翻攤賭博……一二七
日本人は白んぼだ……一二〇
大蛇船の進行を止む……一三一
職工熊……一三三
喇嘛寺院と日本の古器物……一三五
源氏の紋印蒙古に在り……一三六
馬賊の旅行保險……一三七
新羅朝の三大遺物……一三八
朝鮮の日本左衛門……一四〇

大澤龍の人物評……一四五
内田硬石の好諧……一四六
獨貴味の鯨……一四九
國事探偵の誤認……一五〇
天子に姓無きは如何……一五一
人間の買賣直段……一五三
鶴の飼養法……一五七
鹽は山から堀出すのを知らぬか……一五九
犬の浮浪罪……一六〇
喰付かれると三拾圓……一六一
鴉の本場だもの……一六三
死んで居れば一圓……一六四
乞食橋……一六五
虱て着物が這ひ出す……一六五

澤村のお馬……一六七
紅燈會の女魁……一六八
滕東海の沈勇……一六九
伊藤侯は小さい人……一七〇
泣兒と日本來……一七一
味噌と糞……一七二
山猪と山鯊……一七三
加藤と上等と毛唐の間違ひ……一七四
土匪業……一七四
喰人々種……一七五
會長は權利として頰肉を喰ふ……一七七
樹上の放糞……一七九
土人の弓漁……一八二
日本人は神樣也……一八四
奇怪なる葬式……一八六
戰爭中の舞踏……一八八
女豪傑……一九〇
廣東の癩病船……一九二
北京の乞食……一九三
强盜の寄附金募集……一九四
醜業婦の出產地……一九六
長崎人の勞力……一九九
洞仙嶺の旅神樣……二〇〇
淸廉な人の收賄でも七十萬兩……二〇二
倭唐內ぢや無い和韓內……二〇三
靑天白日の大旗……二〇四
君子自重せよ……二〇六
無用の者入るべからず……二〇七

道路通過税……二〇七
去年の死人を今年泣く……二〇九
方角知らずの大陸漂遊者……二一〇
日本紙は猥褻用……二一一
日本人の威光寒氣を驅逐す……二一二
閻魔の厄拂ひ……二一三

以上

此レ誤也、皆ニ"カヤ"ナルベシ。然リ――　二者作者ヲ為読者ニ
天ニ吠ル、

新奇談　征赤毛布

長田秋濤著

貴族マドロスとなる

と云ふ記事が二號活字の見出しにて露國プラゴウェチェンスク府の、「アムルスキガゼタ」の雜報に掲げられた事がある、夫を見た同地在留の日本人は一齊に驚て見ると、其記事大要は、

當市に在留する日本人某は日本の貴族なるが目下イグナシ村の船渠に修理せられつゝある黒龍江滊船會社のマドロスと爲つて

道路通過税……二〇八
去年の死人を今年泣く……二〇九
方角知らずの大陸漂遊者……二一〇
日本紙は猥褻用……二一一
日本人の威光寒氣を驅逐す……二一二
閻魔の厄拂ひ……二一四

以上

よむに値せぬ話ニ"カヤ"ナルベシ。
然リ…… 二番目ノ者
大ニ出ル、 不満ノ者

遠征奇談 新々赤毛布

長田秋濤著

日本の貴族マドロスとなる

と云ふ記事が、二號活字の見出しにて露國ブラゴウェチェンスク府の、「アムルスキガゼタ」の雜報に掲げられた事がある、夫を見た同地在留の日本人は一齊に驚て見ると、其記事大要は、

當市に在留する日本人某は日本の貴族なるが目下イグナシ村の船渠に修理せられつゝある黒龍江流船會社のマドロスと爲つて

勞働す、他の日本人は彼に對して服從を表して居る、思ふに陰かに國事偵察として當地に來り居る者ならん、孰れグベルナートル（將軍）は處置する所あるならん、

と云ふのであつたが果せるかな日本人某は警察署に引致せられたのである、處が其日本人は實際貴族でも何でも無い只の落ぶれ士族であつたのを旅行券に士族と記載してあつたから直に露語のドウリヤニンと譯して了つたので此騒ぎを起したのであつたさうな、元來露國には士族と云ふ階級が無いから士族と云ふ字を譯するに都人では拙し俗侶では無し已むを得ず貴族と譯した者と云つて見れば馬鹿〻〻しい次第だが風聲鶴唳とは正に此事か露國も御用心堅固と云ふ可しだ。

國賊李華昌

沈香も焚かず屁もひらす豆殼の中にぐる舞ふて屁理窟を羅列して居るのが日本人今日の常態であるが、そこに行くと支那は大國であるから人民も自然大國の風があつて善い事も惡い事も孰れも盛んにやる、だが其働く所以は金を目的として自己の利益以外には目も觸れない、之は支那人の特性だから已むを得ないとしても其中より腰斬梟首す可き賣國奴を出すに至つては情け無い譯である、曾て武府の名譽領事をして居た李華昌と云ふ廣東人は露國政府から勳章などを貰つた手腕家で旅順の租借にも御先に使はれ先頃

の滿州密約も彼が前の旅順參順長クロンプチフスケ大佐が奉天省民政廳長官として赴任した時同行して周旋したのだ、日本ならば斯んな事を爲る奴が出たら早速首が飛ぶのだけれど其處は大國の有り難さ？て今以て不義の榮華に誇つて居るのてある。

歸化露人チープフンタイ

此奴も無禮至極の國賊てある、ハバロフカに居を搆へ富巨萬を積んて贅澤をきめこんて居て露の今帝即位式には雌雄の虎皮を獻納しなどして訶侫を呈した事もあり旅順の租借にも關係して露の爲に非常の働きをなして居る、此二人は金を目的とする支那人とし

ては兎に角成功したと云ふ可してある。

治安妨害の聲

武府（ブラゴベシチエンスク）て或日の事、徒然なるまゝに我同胞等相集り日本の歌謠をうなつて居ると露國巡査が遣つて來て怪しげな歌ふ聲が聞ゆるが一體夫は何だと尋ねるから、これは日本の歌曲じや、我々は徒然の餘り故國の歌を謠つて居る處じや、と答ふると、彼は威嚴をつくろひつゝ、そんな聲は治安に防害があるから唄ふことはならぬ。

露西亞の雪隱

上流社會の雪隱は暖爐の設けがあつて亟寒の時鼻の穴は勿論目迄凍る寒さの日と雖至極暖であるから長臀するにも冷え上る憂が無く至極心地好く感ぜらるゝ、之に反して下等社會のは吹き曝しの儘にて寒さは勿論豚の野郎迄が臭をかぎ付け鼻先で臀を突衝く恐がある、夫のみならず其内部の不潔なること唯々驚く計りて汚物の金色せるが壁と云はず柱と云はず諸處方々に塗付られて居るには閉口せざるを得ない、此は露西亞人先生元來の無頓着に由るか知らぬが臀の汚物を拭ふに指先を用ひ其又指先の汚物をば壁や柱などに塗付け後て一寸手を洗ふて平氣の平左衛門たる弊風あるは

何處迄不潔なる人種やら分らぬのである。

不潔人種の證據

露西亞の清潔と日本人の清潔とは其程度が違つて居る、日本人は雪隱などに行けば必ず水にて手を清め月に幾度處か毎日でも入浴する、夫に反して露人は紙にて臀を拭へば手を洗はず、手を洗ふ者は指にて汚物を拭ふ連中にて日本人が手を洗ふのを見れば彼も指糞仲間かと上流の人達が笑ふ始末だから到底お話にはならぬ、現に女郎屋規則第十條に於て毎週入浴せしむ可しとの條項がある位だ、此社會は職業柄分けて清潔を要する者にて政府もなか〳〵

清潔法を厲行して居る積りなるに拘らず其程度の露西亞第一の清潔法が日本第一の不潔にしか當らぬのである。

滑稽なる筆談と物眞

語に通ぜぬ日本の下手淡學者が支那の山東邊に行つて、孔子の墓見度候と書いて示したら支那人が、「孔子は中國の大聖なり見度候は何れの人なるを知らず」と返事したといふ話は誰も能く知つてる所だが、茲に夫よりは面白い笑話がある、先年我軍が旅順を占領した時一人の少年士官が、氣に食はぬ事をした支那人に對し、言葉が分らぬから「目物見」と書いて示したそうだが、支那人は

一向之を解せぬ樣子に見へたから、傍に居た外の士官が目物見とはドー云ふ意味かと聞き糺せば少年士官はぬからぬ顏て「目に物見せん」といふのだと答へたさうな、夫から其少年士官は目物見先生の名を博して居るとの事、大分無理な漢文もある者だ、又或る師團の下士官が之も北支那て支那人の馳走を受けた節、言葉が通ぜぬから筆て以て「御馳走樣難有候と」と書いて見せたけれども矢張り意が通ぜぬから、今度は其字の傍に振り假名を附けて、之ならばよもや分らぬ事はあるまいと思つて差出したが夫れても分らぬ、ソコデ下士は、支那人共は假名さへ知らぬとは何といふ無學だろうと嘆息したそうな、又朝鮮に通漁せる日本の獵師が鷄卵を買ふ爲めに韓人の村へ行き、言葉が分らぬからフンドシを外

し尻引き巻くつて向へむけ、臀の間へ鷄卵に似た形の白石を挿み、口にケヽコーと云つて見せたら、韓人も漸く合點して鷄卵を出して呉れたといふ、是は又頗る御丁寧な説明て今に韓人の笑話に殘つて居る。

大便と小便

日本でも女の立小便する所のないてはないから別に怪しむ迄もないけれども、露西亞でも矢張り女の立小便が流行る、ソシテ彼等のは着物を捲り上げずに其儘、溝などを跨いて、ヂヤー〳〵するから、時には着物に小便の掛ることもあるが一向頓着せぬ、又昔し

蒙古にコンナ話がある、或る男が雪路を行つたら、途の上に極めて大きな女の小便跡がある、而かも垂れ鹽梅が餘程立派て威勢が好い、ソコデ男はスッカリ其女にほれ、之を妻にすれば屹度豪傑の子が出來ると思つて其跡を追ひかけたが、間もなく追付て見れば果して剛健なる大女だ、男は益々喜んて直様之に結婚した所、ヤガテ孕んて後立派な子が生れた、之れが後年生長して男の見込通り天下の豪傑になつたそうな、大便ては朝鮮人の野糞が面白い、彼等が野糞をする時には、先づ頭上の笠を取つて之を放糞の場所から十間も先きに丁寧に直し置く、衣冠といつて朝鮮人は非常に夫を大切に扱ふのだ、夫れに引代へ、放糞後尻の所を石にコスリ付たり、枯葉枯草て拭ふ方はまだ〳〵上等の人物て、大抵の者は

拭はず其儘、だから不潔なること夥しい、又日本の旅客が朝鮮及び滿州抔の田舍に行くと、其邊の奴等が折々「日本人はドーして放糞するだろう」と見物に來る事がある、如何なる者も之には閉口するだろうから、旅行の志ある者は豫て心得置かねばならぬ。

韓語中の外國語

朝鮮にも開國以來大分外國語が國語中に這入て來て、今は殆んど一般に通用せらるゝ者がある、ソシテ其外國語の通用範圍に依つて勢力範圍も推すことが出來る、先づ釜山から京城迄の間にはシンダンジと云ふ言語の通用せぬ所はない、之は日本語にて死んだ

の轉訛である、オカミサンといふ語は今一層廣く通用する、又平安道では支那語の不要などは誰にも分る、轉じて咸鏡道北部に入ると、ピチゲ（マッチの事）など一般に流行するが之も露語のスピチカーから變じたものだ、其外英米人の居る所にはコーテンプラなんどの語が流行する、最も多く旅人の耳に入る重なる語は以上の者であらう。

露國の裁判

露西亞は專制國だけに政治の上には勝手氣儘なこともあれど時に又便利至極なとが無いてもない、裁判所が人を召喚する時など、

被召喚者は指定の時刻に法廷へ出頭したるに法官は自分の都合で之れを待たせ置くにも拘はらず、被召喚者不參の故を以て之に對して亂暴にも欠席裁判を與ふることが間々ある、又或る重大なる罪人で充分長き刑を課すべき筈のものでも、便利なる職業を覺へ居れば存外短き刑期で濟まされることもある、先達て我一人の大工が他の大工を切り殺し捕へられたる時など、大工の職は應用が出來るからと云つて裁判官が之を僅々一ヶ年の刑に處したる如き即ち其一例てある。

韓人の猿

之は曾て僕が或新聞に載せたこともあれどまだ多く世に知られぬから次に記さんに、朝鮮には本來猿が居らぬ、ソコデ數年前或日本人が京城に於て猿芝居を興行し一儲けやらんとしたれば、之を見に來る韓人は果して毎日〳〵非常な數てあつて之が爲め興行人は豫想よりも幾倍せる程の利益を得た、ナゼ猿が是樣に京城の人氣を動かしたかと云ふに、モト〳〵韓人は之を猿と思つて見物に來たのてはない、憐れむべき小さなるソシテ毛の生へたる人間が今度日本から新たに渡つて來た、日本には人間の中にも彼樣な人間が居るとは誠に氣の毒なことてあると、實は猿を弔ふ爲めに押掛たのてある、爺婆連の中には見物し乍らボロ〳〵涙を流して泣いて居つたと云ふ事だ、但し今日ては如何に韓人でも猿に對して

モー斯樣な滑稽な考へは持つて居らぬ。

川上大將荒膽を挫かる

誰に？醜業婦にと云つたら草葉の蔭から夫計りはと云はるゝかも知れぬが、知つてる人が少ない事だから小さい聲で内々に申述る由來其道にかけては世間の定論（も凄しいが）があるから何も云はないが、故川上大將が曾て浦汐に渡航された時の事、大將は孰れ搔く可き旅の耻を何の遠慮が入るものかと、同地の日本娼樓にてお何と云ふ長崎生れの別嬢を侍らせ滯在中は淺からぬ寵愛であつたが最早歸朝せねばならぬから『あのうお何や、此度別れたら

又何時逢ふか分らぬから夫迄の紀念に指環でも買つて遣はさうか……うむ、好々其處に懷中があるから持て行くが好い』と中は幾何か白浪のたち歸る費用ならなくに二三千金入りたる儘に財嚢を渡しつゝ『高が九州の拔天女郎、何程出して指環を買つて來るだらうか、隨分大膽な女ぢやから五十圓も遣つて來るか』と其歸るのを待受て居られると、話變つてお何女郎は早速アルベルス商店に驅付け、あれかこれかと品物を撿めながら心の中に思ふやう『折角大將樣の買ふてやんなはるとぢやけん、そんげん安かとば買うとお顏にかゝるけん、少しは好とば買ほうかしらん、それでもあんまり貴かとも氣の毒かけん、此どんば買うとかう』と自ら問ひ自ら答へて買ひ求めたのが價五百金の寶石入指環であつた、

さて歸つて大將樣にお寛に入れて其直段を告げた時の大將の苦い顏、後にお何の人に語るらく『おんどは五百圓どまあ出さにやあ大將樣のお顏にかゝると思ふたけん彼ば買うたとぢやつたばつてん……』。

馬鹿河豚

人間に馬鹿あれば河豚にも馬鹿あり、何の不思議かあらんと云へば夫迄ぢやか、是は亦途方も無い馬鹿らしい話て人間も馬鹿、河豚も馬鹿と云ふのは黑龍會の內田硬石が浦汐よりポセット灣の方面を觀察の爲めヤンチカと云ふ處に旅行した時の事てある、彼は

同處にて日本人有田某の內に宿をとりて暫時滯在して居ると宿の主人が貴君は河豚を御喰になりますかと云ふから、餘り好まぬ事ながら試に食つて見ると、之が生命と掛替への美味とも覺えねば別に有り難くも思つて居ないのに主人が『どうてす河豚は甘いてせう、ねえ甘いてせう、これだから河豚のチリと云ふ奴は止められないんてす』と先生獨り興悅至極て居るから硬石も『さうてすね、甘いてすね』と一打相槌打つたが最後さあ大變『それては御易い事て河豚ならば此處にはどれ丈てもありますから每日ても御馳走します』と乘出されたのには少々閉口して、イエもう澤山てす共言ひ乘ねて其日は其儘に濟んだが、翌日になると主人が早速河豚の料理に取りかゝる樣子ゆゑ、硬石も物珍らしさに其料理す

る處を見ながら『時にその河豚ですね、西比利亞では一躰河豚は中毒らないんですか、』と實は多少の懸念がある故にそれとは無しに尋ねると主人は庖丁の手を休めずゴシ〳〵と料理ながら『何が貴君、露亞西人は馬鹿ですから西比利亞では河豚も皆な馬鹿ですよ……へ、イ……中るもんですか……西比利亞の河豚は馬鹿河豚ですから中るなんちう道は知りまつせん、』

一攫萬億金、獏河の金山

獏河の金山は滿州に於る尤産出多き有名の金山で此處では支那人の鑛夫を使つて居る爲め採收した金塊を盗まるゝ事夥しい、それ

て鑛山の區域内には嚴重な柵が築てあつて其中で働く事にしてあるから出る時は身躰驗査を施行されなければならぬ、其位に取締法を注意してあるけれども盗まれる事は矢張りなか〳〵減じない相だ、それはどうするかと云ふと其柵の中で盗んだのを銘々方々の地面に見當を付けては埋めて置く、折角堀出された金塊が人が見たら蛙になれと引導を渡されて埋められる、其高が實に素張らしいものである、それを問がな隙がな運び出さうと考へて居ながら漸く其一部分丈位を持出す事が出來て孰れ其内に堀出しに行かうと思つて郷里に歸つたきり再び來る事が出來なかつたり或は死んだりする者が多いから埋められた儘の金塊は蛙に爲つて飛出さうか、それとも堀出しに來て呉れる迄待つて居やうか知らんと彼

此して居る内に先年の義和團騒動で露國兵が滿州の境土を長驅して獏河の金山地方を通過した時に其建物も柵も悉皆燒拂つて仕まつた、それから以來清國政府でも國歩多難で舊來の事業を經續する事が出來ないから獏河金山の舊搭内には實に萬億の價ある金塊が僅一二尺の地の下に埋もれて居る譯だ、此事は誰でも認めて居る事であるけれども未だ其發掘に從事した者が無い、西洋の或無人島には海賊の貯蓄した無數の財寶が藏されて居るとの事であるが、獏河の金山には鑛夫共の臍繰りが莫大な程埋沒して居る、どうだ諸君金堀りに出かけて一攫萬億金をせしめては。

助けてやるが何程出す

朝鮮の海か河かで舟の覆つた時水に陷つた者が大聲を揚げて救を求むると其處へ通り掛つた者は水中の人に向つて先づ談判を初める『貴公の命を助けてやるが其代り金はイクラ呉れる』水中の人『一圓五十錢やるから早く引揚て呉れ』救助者『べらんめえ、(ともいはぬが)そんな安い事て人の命が助けられると思ふかい、ケチ云はずと責めて五兩丈出しねえ』水中の人『五圓はヒドイ、仕方が無いから三圓出さう』こんな鹽梅に水中と船上との永々しき談判があつて兩方の言出値が折合はなければ水中の人は夫れ切り土左衛門となり折合へば身分不相應の大金をせしめられるとは情

けない國柄ぢやないか、但し日本人の根性も次第に腐つて今は大分此邊に近付いて來た樣だから油斷が出來ぬぞ。

露人は泣き虫也

鬼をも取ひしがんずる大男の露西亞人が去る醫師の許で腫物を切開された時、オイ〳〵泣て居るので、傍て見て居た日本人某は餘りのことに噴出して笑つた、すると其男はやがて手術を了つてから某に向ひ、こんな場合に泣かなければ日本人はどんな時に泣くのかと問ふた。

或時船中で露國の一婦人が醉ふて苦しんで居ると、側で其亭主の

大男が泣いて居る、醉ふた婦人が苦しさに泣くのならわかつて居るが醉もせぬ亭主が泣くとはあまりひどいと又もや某は思はず笑ひ出した、さうすると、日本人は同情か無いと云ふて先生頗る立腹した。

浦汐にて某の住みたる隣家の娘海軍々人と親交を結んで居た、然るに其軍人が遠洋航海に出て居る間に女は或男と結婚して了つた、軍人は歸つて其事を聞き娘の家を訪ひ戸口に佇んで泣く事一時間餘てあつた。

巡査の買收競爭

日本人某一日ブラゴウエシチエンスクの市街を散歩し道を爭ふて露人と喧嘩をおつ初めた、すると露人の巡査が來て某を引致せうとするから某は早速ポケットを探り窃かに二十五錢銀貨を査公に與へた、すると形勢俄に一變して相手の露人を引致せうとする色が見へたので彼奴もさる者若干の金を握りて査公のポケットに投込んだ、夫を横から見て居た日本人の友人は五十錢を査公の手に握らせ其顏色を覗ふと査公直に裁斷して曰く、双方共に早く此處を立去れ〳〵。

喧嘩は見て居る奴が惡い

喧嘩と云へば何處も同じ大勢の彌次馬が四邊を取卷き囂々として見物するのは露西亞も亦然りだが其所置を付ける巡査の遣口が頗る面白い、即ち査公殿は喧嘩の場所に馳付るや否やイキナリサーベルの鞘で以て見物人を毆り飛して追散す、其時喧嘩の本人は已に雲を霞と逃亡せて了ふから未だ曾つて喧嘩本人の捕へられた事が無い、何故にさうするかと巡査に問へば彼は呵々大笑して『なあに喧嘩位は見て居る奴の方が惡いから其奴等を追散らせば自然に治まるものだ』

だから日本人は困る

露西亞が旅順占領の當時は餘程日本人に對して警戒した其時チルチレスク附近で鐵道工事に從事して居た數多の日本石工に向ひ鐵道技師は速に逃走する事を勸めたさうだが石工連は一向平氣なもので『誰でも向つて來る奴は此玄翁で擊殺して自分も死ぬ計りですから搏ひません、一人と一人なら損は行かぬです』と答へたのを聞いた露人は嘆息して曰く、『だから日本人は困る』

近衛公の四ッ匍ひ

故近衛霞山公が支那旅行中南京に行かれた時の事である、公は例の支那雪隱にて用を便じて居られたが不圖大事の紙を落して了はれたのてそれかとて人を呼んて持來らしむる譯にも行かず何ぞあるまいかと身のまわりを探されても生憎の事ハンケチさへも所持されざりしと見え百方苦心の末遂に仕方なしに革嚢の置てある處迄四ッ匍ひして行かれたとは餘り愛嬌のある話でも無い、矢張り蠻カラの中だと當時南京に居た某の語りたるを其儘此の如し。

井上雅二一年にして豪傑となる

井上雅二由來荒尾根津の二氏を崇拜する事一通りならず呼ぶには必ず荒尾先生、根津先生と尊敬する事を怠らなかつた、然るに井上雅二先生明治三十年の頃一年足らずの間西比利亞の片角を旅行

して東京に歸つて來たが其時は已に自ら豪傑に爲つて了つたから
して荒尾、根津と呼捨にして決して先生と呼ばなくなつた、曰く、
根津も大分時世に後れたからね。

奥村五百子と驢馬

大阪朝日の西村天囚が清國南京に行つて問も無い程の事である、
天囚居士も此當時は一向に支那語が分らないので何かに不自由て
堪らない處に其使つて居るボーイが來て頻りに『東洋人不好々々』
とつぶやくから漸く覺えた言葉で何が不好かと問返すとボーイは
妙な腰付をして『驢子々々』と答ふる丈は分るけれども其外の言

葉が何の事だか分らぬから之は何でも驢馬がどうかしたのであら
うと思つてフヽンと澄して居るからボーイは張合抜けて其處を退
らうとする時幸に平岡小太郎が入つて來つた、『平岡君、ボーイが
先きから何だか言つてるが一躰何と云ふのだろう聞て呉れ玉へ』
と天囚が頼むから平岡は得意の支那語てボーイを訊問に及ぶと何
の事だ、當時南京に來て居た奥村の婆さんが小便をするのが驢馬
の樣な腰付だから東洋人は不好だとボーイの憤慨し居たるにてあ
りけるとぞ、あなかしこ、

小越平陸の味噌汁

小越平陸酒を飲まずして味噌汁を好む事夥しい、曾て香港で味噌汁と酒の飲み比らべをした奇談がある、然も相手は誰あらう白浪庵滔天で今の牛右衛門であつたから流石の小越も十五椀を啜り盡したが矢張り牛右衛門即ち宮崎寅藏の酒量には叶はなかつた。

小川金三郎の英語教授

上海東文學堂の教師に小川金三郎なる先生があつた、或時支那人の生徒に英語を教ふるとてディリゼントと云ふ言葉と精勵とか勉强とか譯して見せたらうが日本流に出精と書て見せたので生徒は一同にあの方の事と思つて大笑をしたさうな、注意すべき事にこそ、

中野熊五郎の無邪氣

支那通の中野と云へば彼のノロ熊かと知らぬ人も無い好漢だが、或日の事ノロ熊先生内田硬石を捕へて眞面目に語るやう、『あたき(僕)にや惚れとる女兒のあるやなあ、』『何處に』『あの木挽町に青柳と云ふ家があらうが、那處の家に一人居ると、ばつて惚れとるたあ惚れとるけれど一度勘定をしてやらにやあ、もう惚れんと云ふたやなあ』と彼は眞面目にさう信じて居るので其無邪氣さ加減も夥しいと流石の硬石も冷かす言葉が出なかつのである。

放蕩息子の治療

北清戰爭の際永貞府に滯在したる日本の一軍醫が、支那の貴夫人の阿片毒に中られたのを依頼に應じて治療し遣した所、二三日を經て夫がスグに全癒した、此話が其附近一帶に傳はつたれば、日本醫は實に名醫だ、扁若蒼公も遠く及ばぬと云ふ評判が高まつて來て、夫から後は是迄馬鹿にして居た支那人供迄先を爭ふて診察を願ひに來る樣になつた、然るに或る日の事、一人の老人が一人の若者を伴ひ來て軍醫に謁を乞ひ、頓首三拜して願ひ出づる樣には『大人閣下、此若者は私の子息で御座ますが、天性放蕩を好んで頻に家產を擅み出し、兩親に難儀を掛る事非常です、其上イクラ諫めても諭しても親の敎を用ゆる樣子は見えませぬが、閣下を天下の名醫と承り定めて人の心を治す事も御存じだと信じ、放蕩を治す藥を頂戴に罷出ました、何卒事情を御察し下されて御配慮に預り度』と精神込めて眞面目に申出でたから流石の軍醫先生笑ふには笑はれず、殆んど其慰諭の手術がなくて閉口したとの事である。

千金丹は旅行用の菓子

之は蠻地旅行に慣れた人でないと知らぬ話であるが、實際千金丹

や、寶丹や、清心丹の類は客舍燈前菓子もなく話も盡き烟草も乏く口の閑散に堪えざる時分に、菓子代りとして折々一粒づゝ口に入れ置くと、案外長時間其香味を保つ者で甚だ結構な携帶品だ、殊に荷重にもならず、又時々は蠻民を慰めたり治療したりする道具にも使はれるから旅行には缺くべからざる者と云つても差支ない。

四月一日

一度歐羅巴に遊ばれた方は御承知でもあろうが毎年四月一日は如何なる嘘を言ふて世人を欺いても善い事としてある、露西亞も此

事が行はれるので、時にはワザ〳〵遠方より電信を以て友人を欺かんとするとが屢々あるから種々面白い滑稽談も演ぜらるゝ、其内の一寸面白い話は、或人の友人が死去した故に、棺の製造を注文した、處が四月一日であるから、欺まされては馬鹿見た上に却つて笑はれねばならぬと、早呑込して表面には其意を諾し、反對に欺してやろうと時間迄約束して某を飯した後其時間にもなつたから、棺を取りに來た處が、葬具屋の主人は一向平氣なもので棺は造りもせずして冷笑して居るから、某は氣が氣でない、死人の傍らには最早湯灌する許にして其日の内に埋葬せんとて僧まで招て居る始末だから、棺の出來て居るならば渡して呉れと請求したが、主人の曰ふには『戯けなさるな、四月一日だよ、此方も用心して

居る故、顔でも洗つて今少し成程と思ふ樣な妙手段でも講じて御出なさい』と　四月一日て欺されはせぬかと頗る危んて居る樣子が某に知れ、百方其事實なることを辯じたから、サー大變だ、雜具屋の主人も早呑込したのを謝し、ねぢ鉢巻でヤット棺を間に合せたそうな、徒らに作り事して欺し合うのは隨分面白いが、此んな場合に事が相違すると甚だ迷惑するものだ。

日本は米の無い國

世界知らずの韓人共は、日本商人が朝鮮から米や大豆を持ち出すのを見て、『日本はツマラヌ國じやないか、米も、大豆も出來ないの

だろう』と信じ込み、イヤそうじゃ無いと辯解しても中々聞き分けず『米や大豆があるのなら毎年あんなに澤山我國の品を買て行く道理がない』と云ひ張つて居る、彼等がコンナ馬鹿げた考を持てるのは、獨り米大豆に就て許りじや無い、一寸日本人が珍らしいからといつて朝鮮妓生に其下手な書なぞを書いて貰つても、矢張り彼等は日本にや上手な書家が居らぬと考へ、又朴永孝などが書を賣つて日本で生活してると聞いては、日本にや到底も丁鶴羽や櫛東壽の樣な書家は居らぬ者と自惚れてるから可笑いぢやないか、シテ見ると、朝鮮國王が先頃日本人は漢江の氷迄も日本へ持ち行くと云つて驚いたと云ふのも、強ち無理な推測てはあるまいと思はれる。

朝鮮人の馬鹿さ加減

日本にも電信の出來始めには電柱の上に新らしい着物や靴を引き掛け置いて遠方の人に送り得らるゝ者と信じて居たものもあつたといふから、當今の朝鮮に次の樣な話があるといふてソー笑ふ譯にも行かぬか知らぬが、丁度釜山居留地に水道の出來た時、其水道の共用栓口は總て木を以て圍はれ、宛然郵便函の街頭に立つて居る樣な姿だから、韓人供は之を見てドーカあの樣な水の出る木が欲しい者だと云つたソーな、夫れから電燈の出來た時には之に就て煙草火を着けんとした者もある、又京城の電氣鐵道や、京仁の

汽車が竣工した節には、携帶金のなくなる限り、鐵道に乘つて終日同じ道を行つたり來たりして不思議がつて居た者もあるといふ事だ、當今朝鮮の民度はマア是れ位の者だ。

在韓西洋人の朝鮮化

未開國に滯留して餘り久しきに過ぐると自然未開國の感化を受くる者と見え、朝鮮居留の西洋人、特に其稅關吏供は大分朝鮮人らしく成つて居る、ソレがドーして分つたかと云ふに、去る一商人が、此頃朝鮮人の眼を眩惑せしむる爲めに西京西陣織の下等物や、アンチモニーの安器物を釜山へ持込んだ處、稅關の鑑定官たる西

洋人共は、其錦色光彩の燦爛たるを見て、之は一反四五十圓もする者か、コッチの方は一個二三十圓もする品歟と云つて、其眞價が一反四五圓一個二三十錢だと答へても中々本當とは思はず、莫大の稅金を掛けよつて輸入者は飛んだ損害を受けることになつて、韓人を驚かさんとして先づ西洋人を驚かす、思ひも寄らぬ結果となつた者だ。

荒尾精の逸事

東方齊荒尾精が日清貿易研究所を上海に設立した當時の狀況を知つて居る人は少なくないが其創立以來中途にして一頓挫を來した

時の荒尾の苦心を記憶して居る人は少なくなつたから赤毛布と云ふ筋でもないが支那浪人の親分株である丈に其名前なりとも輯中に收めて置かうと思つて少々計り述て置く、始め荒尾先生が各府縣に遊說して生徒を募集し非常の人氣で以て上海に乘出したは好つたが元來此時此程の準備や何かゝ出來たのは實は荒尾の聲望のみでは無つたので時の外務大臣大隈重信が其椅子を去つたのと同時に其經營の運轉を悉皆停止されて了つた、夫と同時に上海に在る生徒間には盛んな不平が破裂する荒尾精は一人で其責任を全國民に負はねばならぬ事となつたので必死の運動を東京でやつて見たがなか〳〵大隈の時の樣に政府が肝を煎つて呉れぬので遂に百方計盡きたる或日の事荒尾は今夜こそ自殺して申譯をせうと思ひ

已に白裝束を着用して短刀を前に置き慨然として時局難を瞑想しつゝあはや大事に及ぼうとする時品川彌次郎の使が來て其計畫を助くる由を通じて來たそうだ、それから荒尾先生は大に力を得て其死を思止つたのであつたが其時荒尾の急を聞て二萬金を投じて其用に充てたのは頭山滿であつて此金は他に非常な必用があつたのを頭山が荒尾を助くる俠氣よりして此方に流用されたのであつた、此二萬金が日清貿易研究所の改革を爲さしめた資金であつたのでそれから荒尾の事業も次第に好況に向つたのである。

山口五郎太の幼兒

佐賀の人に山口五郎太と云ふ豪傑がある事は世人漸く日清戰爭後になつて知つた、此五郎太と云ふ男が鄕里佐賀を去つて一生清國に留る樣になつた其因緣は實に好個の小說材料であるけれども此處には略して置て余り世人に知られて居ない彼の通譯官時代の一小話を記して置かう、彼の金州城攻擊の際に當つて山口は最高級の探偵として清國人の間に出沒して居たが常に二三才の支那小兒を負ふて居るから何にするかと聞くと、之が即ち我輩の探偵を遂げる大事の道具であると云ふ、それをどうするかと聞くと其答が實に意想外である『僕は此餓鬼を負つたまゝ清兵の管內に驅込んで行きなりに此奴の尻をイヤと云ふ程抓つてやる、すると火の付た樣に泣出すだらう、そいつをだましすかしする樣にして陣營の

中を彼地にウロ〳〵此地にウロ〳〵と出口を探してマゴ付き廻ると見せて悉皆敵の様子を見屆けて來るのだ、其内に泣き止うとすると又抓つてやつてウロ〳〵キヨロ〳〵とやる又抓ると斯う云ふ工合にやるのだ、』と聞く者其妙案と大膽とを嘆賞せざるは無かりけりであつた。

千葉久之助の匍逃げ

天祐俠中の驍將として威名遠近に轟いた千葉久之助が匍ふて逃げた事があるとはチト受取れぬ話と云ふ人があるだらうが、之は實に止むを得ない譯である。辯護から先にして置くのは千葉久先生

朝鮮の山中で一匹の大虎を見出したが、幸にして向ふが人の居るのに氣が付かなかつたからソツトと匍ふて逃げて來たのであると云ふ次第だ、空拳猛虎を退治すると云ふ風に昔の豪傑の樣には當世の風潮が許さないからあんな猛獸の何を言ふて聞せても譯の分らぬ奴は敬して遠ける宜しい匍ふて逃げたと云つて千葉久の千葉久たる所以には毫も影響する處でないが、而し餘程恐かつたらうと御察し申すとは或惡口家の話であつた。

山田良政の行備

支那通間にては知らぬ人なき山田良政は單身惠州に入つて三合會

徒と共に革命軍を起したが惠州府城を占領した時眞先に城内に入つたと云ふ消息が世人に知られて居る丈て其退却する時戰死したかそれとも深く内地に匿れて時期を待つゝあるかは由來一の疑問となつて同人間にも知つて居る者が無い、吾輩の聞た處では彼は惠州府城を出る時に革命軍の大將鄭と一處であれば無論助つて居たのだけれど豪膽不敵の山田の事だから此時の退却に殿軍となつて城内を去るのが遲れた爲に多分無殘の戰死を遂げたてあらうと云ふのが確らしい、失れは兎も角として吾輩は何時迄も彼の戰死の確報を聞くのを好まないから此處にその詮議をするのは止して置くが、彼が奮然として單身此戰爭に加はつた所以は人に知られない深い理由があつたのてある、是より先に内田甲（貞平）と孫

逸仙が長崎より上海に向ふた、其時山田は上海にて二士を待受けて南京の劉坤一と當時廣東から上海に來て居る李鴻章の二人を暗殺して後に南清の義軍を起さうと主張したけれども孫逸仙は深く慮る所があると云ふのてどうしても其議に贊成しなかつた、夫から船が長崎を出て上海に着く迄山田は其說を曲げなかつたけれども逸仙孫文も亦なか〳〵頑として聞かない、山田は激して孫に逼り孫は涙を流して其非を說くのてあるから遂に山田の議が採用されない事になつたのてある、故に彼は上海に着と其儘袂を拂つて孫等の一行と別れたまゝ孤劍飄然として清國絕南の域に入り志を得ずんば生きて再び世人に知られざる可しと誓ひつゝ遂に死生を知らぬ樣になつたのてある。

秋山運次郎の歸鄕嘆

浦汐に居住して貿易に從事して居た秋山運次郎が一度非常の大失敗を招いて筑前に流涙し內田硬石の紹介にて福岡の柔術道場天眞館に食客をして居た時彼は知人に向ひ愚痴を並べて曰く『大風起らず雲飛揚せず、威は海外に屈して故鄕に歸る、何處にか錢を得て失策を償はん』と聞くもの其境遇を憐れむ。

支那婦人の自殺手段と其目的

支那婦人の自殺を企つる場合にはどうして死ぬかと云ふと日本の樣に自由に外出が出來ないから淵川に身を投げると云ふ譯には行かぬ、それからブランコ往生もあまり流行せぬ、一番多いのは鴉片を嚥むのであつて間にはマッチの先を無闇と甜るなどの新發明をやらかすのもある、間には洒落れて居るのになると金塊を嚥むのもある、而し近來は鴉片を用ふる者が一番に多いとの事だ、扨其目的と云ふのも可笑しが彼等は實際目的を有して自殺すると云ふのは多く怨を酬ゆると云ふ觀念で死んで祟らうと云ふのが一番多いのださうな、それから少し風の變つたのは怨む奴の家に出かけて行つて其處の座敷で往生する、さうすると官吏が檢視に來るから其內では非常な迷惑と散財（官吏に贈賄せねば大變な事にな

るから）とをかけた上に其家が化物屋敷となる、と斯う云ふ風に死んで波瀾を起させるのが目的である、或は亭主の不身持を諫めて聞かれない爲に自殺するなどの古風なのも間々あるし、恥を洒した悔しまぎれのもあれば、子の無いのを苦にしてなどの憐れなのもある、つまり世をはかなく思つて死を欲するのと前に云つた復讐の觀念から死を惜まないのとは比較的後者の方が多數てあるとの事、なんとまあ消極的の人種ではあるまいか。

杏花村に五文の貸付

朝鮮内地を旅行すると桃李の花盛りの頃などは『牧童遙指杏花村』など云ふ詩句の通りの好風景があるから其實の熟した頃には左も甘さうなのが累々として房をなして居る、嘗て日本人某が此杏花村の一農家を訪ふて其實つて居る杏子を賣つて呉れぬかと云つて韓錢を十文與へた處が其家の老婆は某が持ちきれぬ程澤山にちぎつて遣れて且つ心配さうに云ふには日本サラミ妾に錢を五文貸さないか、さうすればお前樣が來年今頃此處を通る時に又御座らつしやると杏子は欲しい丈進上するからどうぞ五文貸して置て呉れないだらうか、』と頻りに熱心に頼むから某は『貸しても遣らうが一躰其錢をどうするか、』と尋ねると老婆の答が實に無邪氣である『今日本サラミが錢を十文呉れたからモウ五文丈け足してから市に行つて孫のおもちやを買つてやるのだからどうぞ貸しといてお

『呉れ』と某即ち五文の大金を貸付けて去る。

田中侍郎の戰利品

朝鮮に於る日清兩軍衝突の序幕であつた成歡驛の戰が今濟んだ計りて清兵は牙山方面に退却する我軍は長驅して窮追すると云ふドサクサまぎれの眞最中本間九介は天祐俠の一員であつたから此時も戰線を出入して居た、處が兵士や新聞記者などが牙山の方に向つて息を切らして走る樣子の余りに氣の毒に見えるから之は一つ元氣を付けてやる可しと早速路傍の一酒店より燒酎を買ひ來りて通る者毎に飲ませてやつて居たが扨勘定となると本間先生一文も

所持して居ないので酒店の老翁は頻りと請求して止まないのに拂ふてやる事が出來ないから大に閉口して居るとノサリ〳〵と遣つて來たのが田中侍郎だ、それから本間が錢が無くつて弱つたと話すのを聞いて何處にか行つて了つたが間も無く歸つて來るのを見ると田中の肩から胸の邊りは繩に貫いた韓錢で以て鎧を附けた樣に見ゆる、それを皆拋り出して酒店の老翁に拂つてやると老翁は三拜九拜して禮を云ひ、こんなに澤山に頂戴しては濟みませんが、どうも有り難う御座ります之丈けあれば私は一生樂に暮らします ると云ふ、偖本間は田中に向ひ君は今の錢を何處から持つて來たと問へば田中は笑ひながら『清兵の死骸から貰つて來たんだ、行つて見玉へ何程でもあるんだ』と答へた、彼は死生の間に於て死

骸の所持金を戰利品として來て本間の急場を救けて遣つたのである。此機轉とゾッ〳〵しさとは到底尋常人は及ぶ可らざる所であるのだ。

鈴木天眼の御經文

朝鮮の天祐俠事件の時俠徒中の軍師として有名なりし鈴木天眼が俠徒十數人と共に八道隨一の靈蹟なる鷄籠山新元寺と云ふ大禪宇に籠城して居た折の事、元來法華の信者である天眼の事だから寺の僧侶が勤行をするのに加はつて南無妙法蓮華經と遣つて居たが寺の和尚等は日本では南無阿彌陀佛と云ふ事をあんなに長く云ふ

のであらうと思ひ頻りに其奇特なのを賞嘆して寺内の人望は悉く天眼の一身に集り爲に厚遇さるゝ事も群を拔て居た、それでどうするかと云ふと當時俠徒の兵站部は非常に糖分の物に欠乏して居る際であるのに甘草湯に蜂蜜と薑を入れたのを毎日一杯宛天眼丈に饗する事が彼等の尤厚意を表するのであつたから之を見て居る他の豪傑連は孰れも垂涎三尺で種々と天眼軍師に嘆願しては其配分を請ふて居たさうだ、天眼の宗旨違ひの經文で甘く遣つて居たのは以來の一笑話柄である。

南瓜の仇討

前項の如く大勢の日本人が雞籠山の寺内に假寓して日々無聊に苦しんで居るから小坊主共が折々遣つて來ては日本語の研究をしたがる、それに彼等は坊主丈の問を出して『僧侶の事を日本では何と云ひますか』と云ふから俠徒中の惡戯者がからかい半分に『日本ではナマクサ坊主と云ふ』と敎へたので、坊主共大得意で口の内で頻に『ナマクサ坊主』と繰返して居るから其後は用ある時には誰でも『ナマクサ坊主』とさへ云へば彼等は早速にやつて來て悅んで用事を辯じて呉れる、それから次に和尙樣の事は何と云ふかと尋ねるから『腐れ坊主』と敎へると小僧共喜んで和尙を呼ぶ時には『腐れ坊主』とやると和尙は平氣で『エー』と答ふる其笑かしさと云ふものは到底抱腹絕倒を禁じなかつた、夫でも彼等は

何の爲に斯く笑はれるのか薩張り譯が分らないから別に注意する事も無つた、之は俠徒の豪傑が無聊に苦しんでの爲ばかりでなく實は此寺の和尙が自分計り毎日南瓜を食つて俠徒には少しも分與して呉れないんだから仇討の爲にこんな惡口を敎へたものだつたさうな。

宮川五郎三郎の石炭

宮川五郎三郎の奇行は屢々世の耳カラ驚をさへ駭かすのである、彼が拳匪事件後に北京に滯在して居る時尤痛快なる嘲罵を一塊の石炭に寓して日本の軍人連をして顏色なからしめた話があるから、

述べて置く、宮川或日の事日本の武官や紳士共の會合せる宴會に臨み席上一場の演說を爲して曰く『諸君は頻りに古器物を愛して其探索に御熱心の樣子だが拙者は世界あつてより以來最舊の一遺物を所持して居る、それは此石炭である、諸君は古い物〳〵と云つて何でも古くさへあれば珍重さるゝ樣子だが、古い物ならなんと此石炭に及ぶもの無らうではありませんか、』と滿座の客一言も無く只感歎して相顧るのみであつた。

宮崎滔天仙人と爲る

今の桃中軒牛右衛門即ち宮崎滔天は身の丈六尺の大男美髯長く頗

から垂れて風骨自ら凡ならざる樣に見ゆ、彼が例の三十三年の時新架坡への往路、廣東の某會館に遊びたる處、偶然席上に於て多年神仙術を研究して居る男に出逢つた、然るに其男はック〳〵宮崎の容貌を打眺めて居たが聽ての事、『貴下は何方から御出になつた』と丁寧に問ひ初めたから宮崎は何氣なく『東方から海を渡て來た』と答へたれば其男は扨こそと云ふ顏色にて益々敬意を表し『夫ぢや貴下は雲に乘つて御出になつたか鶴に乘つて御出になつたか』と飛んでもない奇問を發して來た、宮崎も之は大分變な奴バイと思つたが早速に又『拙者は黑烟に乘つて來たんだ』と蒸氣や出て行くの俗歌から速く考付て洒落半分に答へた所『烟に乘つた仙人は古から除り聞かん樣ぢやがこりや己の見當違ひで事に依

ると仙人の出來損なひかも知れん』と其男は頻りに顎を捻つて考へて居たげな、處が宮崎滔天今は仙人ならぬ浪花節語りの群に入りて雲右工門の幕下に隱れて居る、然らば則ち彼は雲に隱るゝの藝人となつて居る譯だから今度其時の支那人に逢ふたならさう云つて遣ると好い。

朝鮮第一の大釜

我國では石川五右衛門を煮た釜に上越す者は無いが朝鮮にはまだ〳〵大きなのがある、夫は太閤が朝鮮征伐をした時朝鮮の方で生捕つた日本人を片端から煮た釜で今でも三つ四つ殘つて居る、夫

よりも一つ大きなのは忠淸道連山郡馬九坪から懷德に通ずる道中の介峙と云ふ塲所にあるのだが此處は元高麗朝に有名な介峙寺の遺跡で其路傍の田の中に地鐵の厚さ約四寸直經約一丈四五尺に達する稀有の大釜がある、其釜は端の一部が欠損して斜に東方に傾きたるまゝ約三分の二計りは土中に埋沒して居る、韓人の話では此釜が朝鮮第一の釜で昔時介峙寺に於て每朝僧侶の味噌汁を煮るのに用ゐたさうだ、然るに或時一人の僧侶が誤つて釜の中に陷つて溺れ死んだから其後は不吉として土中に埋めたのであるとの事、又或時盜賊が地鐵を取る爲に釜の一端を欠きたる處が釜の靈の祟に逢ふて即刻斃れ死んで了つたので世人は皆々恐を抱き夫から後は又と二度盜みに來る者が無くなつたと云ふ話である、此釜の大

ささから見ると其當時の寺がどんな太寺であつたか僧侶が何百千人居つたか想像も及はぬ程盛大なものであつたと思はれる。

三年間死人を柿の木に吊す

朝鮮ではねしか痘病で死んだ者の身體を三年間柿の木に吊して置て烏や鵲の啄くまゝに任せて置く風がある、變な風もあればあるものだ。

半夜鷄を聽て牛の活血を啜る

朝鮮旅行中には毎々出逢ふ話だが同宿の韓人供は折々夜半に飛起きるから何をするかと思ふて外に出て忽酒屋に走る、其後に附て酒家に這入て見ると先客が最早十人も居つて皆一所に牛の活血を肴にして燒酎を飲む、是は吃度一度寢て眼が覺めた頃に始める仕事であるが牛の活血は大分滋養になるとの事を聞た。

井上藤三の手柄

天祐俠中の少年勇士井上藤三が朝鮮に於る大出來の手柄話がある、折しも馬乘の日本人二名野路の嵐に征衫を翻しながら疾驅して行くのは時澤右一（當時休職陸軍中尉）と十六歳の少年井上藤三て

ある、其後より數十弓を遲れて徒歩にて續きたるは俠徒中の急先鋒内田甲（良平）である、其行先に立止つて一行を遮らうとした一韓人があつたのを馬上の二士は疾風の如く驅拔たので今度は内田の番となつた、内田は出逢がしらに組付て來る韓人を宙に返して側の田の中に投飛し後をも見ずに飛出さうとすると何時の間に拾ひたりけん手頃の石塊を持て内田の後頭部をした〻かに毆つたのは今しがた投飛した韓人であるから内田は大喝一聲、携へて居た仕込杖を以て其奴の眞向から擲き付けると其勢に鞘が走つて額口二寸計りを切裂いた、さア切る筈では無つたのが機で斯うなつたから堪らない近邊に居た韓人はバラ〳〵と驅付けて内田の周圍を取巻き死礫の雨を降らし始めた中にも一刀斬付られた奴はアッ

と云つて仕込杖を攫んだので鞘丈を引タクリ襟流る〻血汐に眼が晦んで盲滅法に振り廻して居る、内田は血刀を提げた儘寄らば斬らんと身搆して居る、此時、時澤井上の二士は後を振り返つて驚きながらヒラリと馬より飛下りて内田を救はんと韋駄天の如く驅付たは好いが時澤は途中にて立止り頻りと腰の周りを探して狼狽して居るのを一足後れに追付たる井上が『時澤さん、ホラ刀』と云つて差出したのは今しも時澤が懸命に爲つて探して居る軍刀であつた、斯て三人拔連れて韓人等を追散しながら再び目的地を差して前の行程を續けたのである、『時澤さん、ホラ刀』の一言何等の無邪氣にして活機ある言葉ぞ、是は時澤が乘馬中軍刀がガチャ〳〵と腰の邊に邪魔をするので故意と外して鞍の横に挾んで居た

のを事急にして忘れたる儘に飛下りてポラ刀と差出さるゝ迄知らざりし爲である、此事後に俠徒中の一笑話に爲つたが井上藤三の沈勇なる此擧動は十六歳の少年としては頗る嘉す可して由來一の手柄話として傳へられて居る。

橋險の强盗

そんな名前の人が居るかと云へば夫れ迄だが兎も角もさう云ふ人が試に强盗を遣らうとして大の失策を演じた古今無類のお話がある、處は上海で日清戰役よりズット以前の事日本の浪人が寄集つては、諸君、此老大の支那帝國をどうすれば好いか、切取り勝手

と投出されて居ても御同樣に空拳では致し方が無いでは御座らぬか、夫に忌々敷いのはチャンの金持て御座るて、彼奴共は正金てナンボでも庫の中に藏つて居やがる、之を一つ充分にフンダクツて遣らうでは御座らぬかと評議をした譯でもあるまいが橋險先生大に軍用金の必用を感じたと見え自分は付辮髪の僞支那人の儘ピストルを懷にし上海城内なる或る質屋を覗つて忍入らうとした、すると向ふでも一夜造りの素人盗賊に浮として遣られる樣なヘマは遣り居らぬ其處にはチャンと夜廻りの男が雇ふてあつて火の用心とも何とも云はず暗黑裡からぬつと出て橋險を誰何する、處て橋險先生は此奴洒落ちよる、一つ案内さして呉れやうと突と寄るなり胸倉を攫んてピストルを差付け金庫の在る處に案内しろと怒

鳴つた迄は大出來だが、此夜廻りの男は無双の大力であつたので橋險のピストルを差付た手首を握つて銃口を空に向けさせ一振りふつて胸倉を取られたのを離してしまつた、そこで今迄の主客は俄に地位を顚倒して了つて橋險は握られたる右手を振り離さうとするけれども悲しやイッカナ動かないのである、こは殘念と死物狂に荒廻つて漸つとの事に驚攫から逃れる丈は逃れたが、此は大變大事のピストルを向ふの手に捻ぢ上げられて居るから三十六計……處をドッコイ待つたと攫んだ辮髪アラ不思議やな根元よりずるりと拔けて夜廻りの手に殘つたのを見も返らず後は野となれ山となれ生命丈は助けて呉れと逃げ戻つて來たとの事、夜廻りの男こそ好い氣色で立派のピストル一挺を分捕して引拔いた辮髪に

自分の大力の程を誇つて居たてあらう、之を見た仲間のチャン先生等は、なんだ辮髪を引拔いだ、謔つけ日本の三保の谷の鍛引ぢやあんめえし頭の皮の破れるのを我慢して髪を引拔れても關はんで逃出す奴があるものか、よく見やがれ附髪ぢやないか、と云つたかどうか其處迄は分らず。

本間九介の速答

朝鮮通の本間如囚は同人間の朝鮮字引て何を問はれても知らぬと云はない、其高慢の鼻を少しへコマして遣らんと或時内田硬石が『本間、貴樣は朝鮮中にどの位ひ蠅が居るか知つとるや、サラミ

（朝鮮人）の數と比較したらどう云ふ割合ぢやらうかいね』との難問を提出すると本間の早答が面白い『夫はサラミとサラミが室内で出逢つてから先づ自分の顔に簇り付て居る蠅を拂つて向ふの男の顔を見やうとすると向ふでも同樣に面上の蠅を追ひ拂つて、おゝ誰かと思つたら金兵衛だな、さう云ふ手前は銀六か、いや久し振りだつたねえ、（と此時本間は誰やらの假聲を遣ふ）と云ふ位居るんだ、どうだい大概見當が付くだらう』と空嘯いて居る。

密航婦の横奪

朝鮮の近海では時々密航婦の横奪が流行する、其次第を詳說すると隨分滑稽な然も亂暴な事柄で內地に計りへバリ付て居る連中には誠のやうに聞ゆるであらうが事長くともお話するから聞き玉へ、韓海通漁指針の著者なる葛生修亮が豆滿江口の附近を視察せん爲め韓國沿岸通漁組合の巡羅船に搭じて釜山を發し途中城津に着して日本人の營業せる某旅舍に休憩したと思ひ玉へ、其處に腕節は岩が根の如く荒くれ顏色は仁王の如く凄しき男が二人打揃つてチ●ト御願の筋あつて參つたりと云ふからお前達は何者だと聞くと、此近海の海鼠漁に從事して居る潛水業者でありますが實は其私共が仕事に出ますのに面倒でありますから女房共を日本のお役人の處に預けて參つたのですが、實は其留主の間に其お役人共が貴下、下女にこそ使つて下さいと預けて置ましたのを二人して各自に戲

みましたので……ヘイ酒宴でもしたあげくてせうよ、彼共も大層くやしがつて居りますが、一躰お役人と云ふ者はそんな事をしても宜しいので御座いませうか、と鬼の様な男が泣かん計りに訴えて來たのである、葛生は漁業組合の事務にこそ關係して居るが有夫姦事件の裁判官たる事は出來ないから、躰好く慰めて歸さうと思ひ、夫はお前方の女房であれば法律と云ふものがあるからどうとてもするが好いては無いか、先がお役人ならば猶更早く事が辨ずるであらうから私にそんな事を訴へられては困るぢやないか、と答へたが二人は顔を見合せて譯の分らぬ苦笑をしながら、實は其女が私共の女房と云ふ事が役人の前では言はれませぬのでして、實は其私共が連れて來ましたので……イヘエ、船からてありま

す。ハヽア成る程船から連れて來たと云へば分捕品だな、ぢやア仕方が無いぢやないかと大笑に爲つてしまつたので二人は尙物足らぬ樣に悄々として立去つたが後に聞けば彼潜水業者共が分捕ぢや無い密航婦の横奪をするのは珍らしからぬ事で頗る珍痴奇の次第であるから聞くが儘を記せば斯う云ふ譯である、

朝鮮の各港迄は日本女子の渡航が容易であるけれども夫では思ふ程の好い金の蔓にあり付かないものだから露西亞領の方に出掛やうと思ふのは例の醜業婦一般の志願である、そこで誘拐者が浦汐にても連れて行てやると云へば如何なる危險を犯してでも行うと云ふのは彼等の盲人蛇に恐ざる所で小さい漁船に女四五人も乘せて二三人の男が沿海の波濤を乘切るのである、すると隨分の日數

も要する譯で時折は陸に上つて食料品も求めねばならず間には其買求む可き金が無い爲に船繋りした港を幸に韓人共に資本入らずの娼法をして夫から出掛けると云ふ樣な連中もあるさうな、然るに此密航婦を乘せたる漁船が地方近くを進んで行くと北部韓海より露領の沿岸近くに出漁して居る多くの日本漁船が居て其密航船を捕へ女共を奪ふのであつて、前に云つた二人の男も矢張り此傳て卷き上げた女であるから亦人に取られるのも致方無い譯だ、夫に就て可笑いのは、此潜水業共が一隻の密行船を押領して其中から面の好い女を二人丈け引上げて他は無事に通過させたのは好いが元來海鼠漁の潜水器を使用して居る漁船には潜水者、網引き、船頭など多人數乘つて居る其内の一番勢力の強いのは潜水者であ

るから二人の女は潜水者と網引きの男とが自分の物にしてしまつて出漁中船中に携帶する事に爲つたが、さあ自分の物と爲つて見ると人から横奪をされはせぬかと心配でならぬから海の底に這入つて仕事をして居ると氣が氣て無いので當り前の時間丈の仕事をしないで浮上つて來ては樣子を見る、又沈んでも直に出て見たくなる網引きの男も船中では潜水者に次て勢力がある丈役目が肝腎で暇が無いから女の方に眼が屆かぬ、夫で以て屢〻嫉妬喧嘩が起るし、仕事は潜水者が絶へずブカ〳〵と浮て計り來るので一向に實が入らない、其爲に收獲が滅切と減少する、是に於て資本主なる親方が心配し出して夫ではどうも事業の上に差支へると云ふのて女を船から下して漁夫の納屋に置せる事にした、處が潜水者も

網引きも矢張り安心が出來ないのは同樣で種々な苦情計り湧くからして夫ではお役人の處に預けて置けば安心であると云つてさうさせたのが、何處にも吹く春の風で落花狼籍は此處にも免かれ無つたと分つて見ればさても〳〵と葛生修亮先生大に嘆息したりけりと云ふ事だ。

運吉の强膽

我日本人の浦汐に渡り住居する樣に爲つた其元祖と云ふ可きは長崎縣人鈴木運吉なる者である、彼は十二三歲の頃（慶應年間）父と俱に近海に漁に出た處が暴風の爲に吹流されて行く內に父には

死なれ只一人何處とも知らぬ海岸に吹着られ既に死人の樣に爲て居たのを附近の蠻子即ち支那人に發見せられて漸く一命を助かり、夫から年月を經るに從つて言語を覺へたので頭に辮髮を蓄へ支那服を穿ち見事支那人に成り澄して成長したのである、後來第に滿州の各方面を徘徊して馬賊强盜の仲間にも出入し彼等の狀態より秘密の點迄も審かに知る事が出來る樣になつた、折から露西亞人が入込んで來たので早速に露語を覺へて頗る熟達したのであるから日本人が始めて渡航し來る樣に爲つた曉には辮髮を去つて再び元の日本人に歸り通辯等の職に從ふて種々の便宜を同胞に與へた爲浦汐に於ては日本人の元祖として今日迄其名を知られて居るのである。

同人は嘗て浦汐警察署の刑事を奉職して探偵の手腕頗る機敏なりとの評を受た事がある、之が爲に强盜博徒の輩多くは其影を匿して暴行を恐にする者なくウンキーと呼んで頗る畏服して居たさうだ、然るに或時日本人某がニコリスクより浦汐に歸る途中强盜の爲に殺害された事があつたが其死體は漸く一年餘の後に發見されたので犯人搜索の手懸りと爲る可きものがないのを鈴木運吉は大に憤慨した、因て彼は同胞の爲に是非共其仇を報ひやうと決心したから數月の間自ら賊の巢窟に出入して犯人を捕縛し浦汐に引致して來た、其强膽なる擧動と探偵の巧妙とは露人を驚嘆せしむるに餘りあつたのである、彼は明治二十七年の日清戰役には自ら請ふて通譯官となり軍隊の爲に少なからぬ貢獻をした、夫から戰爭

が濟んで浦汐に歸り間も無く其踪跡を失ふたとの事であるが、或人は米國に渡航したと云ふけれど其眞僞は今に判然し無いとの事である。

日本流の露語

西比利亞在留の日本人は正則に露語を學んだ者が少ない、就中女軍連中などは隨分不可思議千萬の言語を用ふるのであるが露人の方では聞き慣れて居るせいか自然に通用するけれど間には抱腹絶倒の事も少なく無い、其例を擧れば、

サルダーツ（Cou d'ours.）は兵士と云ふ事である、夫をサオダケと云ふ、何の事

かと思ふと兵士の丈高くして竿竹の樣であると云ふ譯ぢやさうな。

シチエクロー（玻璃の事）と云ふ可きをヒチクローと呼ぶのは多分七九郎など人の名に似通ひたる音を採たのであらう。

ドスイダーニヤ（左樣なら）と云ふ可きをゴショーダーニと呼ぶのは五升樽位に覺へて居るのであらう。

斯の如く不思議なる日本流の露西亞語が遠慮無く流行して居るから時とすると抱腹絶倒の喜劇を演ずる事がある、現に浦潮に於て某紳士が露人の訪問を受けた時僅に覺へたる一句なり共直接に話がしたくなつたと見え露語にて有難ふ御座りますと言ひ出したるに露人は一向感ぜぬ容子なれども通辯が戯いた顏をしたるを見て多分突然に話し出したから露人には聞へ無つたかも知れぬけれど

通辯は自分の露語を話したので戯いた樣だと頗る得意の色を現したが、後にて聞ばコハなしたり、プラゴダリユー、ワス（有難ふ御座ります）をパラグダリマスと心覺して居た其儘を喋り出したので露人の感ぜぬ容子なりしも尤至極、又通辯の戯いたのも尙更無理の無い事と判然し其評判が忽廣がつて今にパラグダリマス先生と云つて友人間に冷かされて居るさうな。

又或人がはがきを買に行かんとて其名詞を習ひ途中にて忘れぬ樣に頻りと唱へ行きしも、こは何とせん郵便局に這入るや否忽に失念してどうしても思ひ出さず、漸くにしてアックリートエ、ヒスタイ、エシと言ひしに實捌掛の婦人はキヤッと叫んで驅出したれば偖はまくじつたりと逃歸り知人に其狀を語りたるに、はがきは

アックリートエヒシモーなれどもヒスダーと云へば開た處の物言ばぬ唇の事を指すなれば婦人の驚いたも尤と判り其時捉へられざりしを悅びたる奇談がある。

支那人の露語

從來東部西比利亞に居住せし支那人は蠻子（マンザ）と云つたので露人は總ての支那人をマンザと呼ぶ之に對して支那人の方から露人を毛子（モーザ）と云ふ、又露西亞と云ふ事を露語にてルースキーと云ふので支那人は之をロオソクと訛るなど可笑しい事が少なく無い、其外全體の言葉多くは正則の發音を爲すものなく日

本女軍連の露語を用ふると大差なしと云つて好い、而し發音は日本人より不器用で一種の支那音的露語を編成して居るから支那人に慣れない露人は其語を解する事が出來ないのである、夫に就て面白い話がある、嘗てネルチンスク附近にて鐵道工事に從事して居る石工の通辯が新來の露人の技師に向つて得意の支那的露語を喋るけれども露西亞の本國から來た計りの先生であつたから一向に其意を通ずる事が出來ないのを傍で見て居た日本人の有田某は氣の毒に思ひ通辯の勞を採つて遣つたので早速用事を辨ずる事が出來た、然るに其支那人通辯人は自國の石工連に向つて『此日本人は露國の官話を知て居る』からして歐露新來の役人と話をするにも自在であると云つて居たとの事、露語にも官話があるものと

心得たる支那人の觀察が面白いてはないか。

人良ト一月月山山

之は朝鮮人の隱語てある、其次第は長尻の知人來りて飯時になるも猶歸らざる時に韓人の妻君密かに亭主の傍に來り小聲にて人良ト一いたしませうかと云ふ其時月月山山の後人良ト一せよと命ぜられれば飯を饗するに及ばずと云ふ意にて人良ト一せよと答ふれば御飯を出しなさいと云ふのてある、此意味は韓人にても通人に非れば解する者稀てあるけれど怜悧なる我讀者の如きは大抵推察されたてあらう。

呑氣なる强盜、呑氣なる捕虜。

朝鮮人は元來我と同文同種てあるは勿論だが數千年前我祖先の老耄漢ばかりが移住した國土と見へ其子孫の呑氣さ加減が計られぬ、呑氣と云へば此國ては盜賊までが呑氣て、到底我國の鼠賊の樣に活馬の目を抜く程の働きを爲す者が無い、或時吉倉汪聖等が平安道の山間を旅行した時の事、折から雪融けの頃てあつて山中は甚物騷てあつたけれども日本人の癖として物騷なる所は尙更面白き心地て出て來た處は或る一の峠てある、其絶頂の掛茶屋らしき處に休憩して里人の語るを聞ば、此家には昨日迄五人連の强盜が籠

つて八十五名の旅人を擒にし居たとの事である、偖は五人にて八十五名を擒にせしとやそは中々の剛の者なりイデ其詳しき有様を承らんと膝押進むれば、里人は長烟管を下に差置きながら、去ればとよ其事なれ今より十二日前の事なりき此店に五人の強盗押掛來りて先づ主人を縛し傍の十五畳の一室に押込み夫より通り掛りの旅客を見れば一々之を家に呼込み五人總掛りにて六寸計りの小刀を閃かしつゝ、汝若し所持金を渡さゞれば汝の陰莖を斷切る可し夫が悲くば錢を渡せよと脅喝して其財布を奪ひ斯くして一日に七八人宛の旅人を掠かして居たが事の速に四方に漏るゝを恐るゝ爲に悉く十五畳の室にブチ込み食物も與へず其儘十二三日間生擒にして置たとの事である、左る程に盗賊の立去りたる日には捕虜

總じて八十五人の大勢に達して居たので後に捕へられた者はマダしもなれど數日前より捕はれて飯も喰ず呑氣に放還を待ち居たる者は肉落ち眼窪み誠に哀れなる樣子であつたと、聞けば何ともはや馬鹿氣切つたる話て成程之では八十五人が五人の賊に捕はれたるも無理ならぬ事であると吉倉等も始めて合點したさうだ。

田中侍郎の一喝

天祐俠徒が朝鮮を荒れ廻つた時の出來事は吉倉凡農氏が編纂せる韓山虎嘯錄の前後兩篇中に詳細を悉して居るから此處には俠徒中の驍將田中侍郎の面目を活寫するに足る可き一小話を掲げやう、

俠徒の一行が馱馬を雇はんとて其徴發方を某處の郡守に談判に行った時の事である、郡守は言を左右に托して一向求めに應ずる氣色が見へないから、田中は怒心頭に發し大の眼玉を剝き大刀の欄に手をかけて大喝一聲怒鳴り付たから堪らない郡守先生以下座中の下僚は孰れも顏色を失ひ、承知の旨を答へたのである、其隙に彼は一行の俠徒を顧み韓人等に見へぬ樣ペロリと舌を出して『てな事を云はなくちや……』と鼻歌を謠つて居るけれども朝鮮人の野郎共には日本の言葉が分らぬから何と云はれても矢張りビクビクと慄ひ上つて居た。

序ながら臺灣に於る田中侍郎の血塗れになつた話を記して置こう。

頃は明治三十年五月八日の土匪騷動の時であつた、田中の住居は

當時臺北城外の大稻埕であつて穩かならぬ風說は專ら土人間に傳つて居るのを知つて居たから今夜こそは土匪が大擧して臺北城を襲ふに相違ないと思ひ心待ちして居ると、其夜は雨催で宵よりポツ〳〵と落ち始めたのがやがて午前二時と思ふ頃犬の遠吠もろとも耳を裂ざく銃聲は大稻埕の街上に響き渡り中北街の方に當りて一條の火光天を焦して登るのである、暫くすると一齊射擊の音につれて降りしきる雨の物音凄く敵は何處より進入したのか、日本兵は何處に居つて防禦してゐるのか、少しも分らぬのだから內地人も土地の商人も只一縮みに家の內に縮まり込んで只管夜の明けるのを待つて居る計りであつたが、田中は銃聲を聞くとその儘直に我家を飛出して偵察巡査の隊と共に街路を縱橫に馳せ廻りなが

ら知人の家を打き起し『なんだ君等は引込んで計り居て戰爭が出來るか、出て來い〳〵』と怒鳴つては勇氣を附けて居た、夫から夜がほの〳〵と明け渡る頃土匪等は掠奪を了つたのと兵士と警察隊の進擊が鋭い爲に路を分つて退却し始めたから、田中はさア進擊だと警察隊の手に加つて大龍洞の方に走り去つた、やがて夜も明け離れて土匪も遠く引上げたらしいから大稻埕居住の內地人は始めて安堵の思をして表の戸口を開けなどして居ると驚たのは、建昌街の入口から田中侍郎が血塗れになつて歸つて來る、大變だ田中さんが手負になつて來たと云つて皆々其傍に寄つて能々見ると負傷した巡査を一人肩にかけて運んで來た爲め田中の衣服が血塗れとなつて居たのであつた、此時の事を思出すと今にも田中の

聲が聞ゆる樣である『なんだ君等はビク〳〵計りして……土匪は遠く退却したから早く行て負傷兵の手當をせんか』と吁々豪膽不敵の田中侍郎も今は亡矣、

田中侍郎は去卅五年一月に長崎の僑居で病死した、吁俠骨侍郎の如きもの近世又其類を空ふす、其死や實に惜む可きである、聞く同人某其傳記逸事を篇して江湖に配たんとするの志ある由、予輩は其速かならん事を希望するのである、

平山周命乞さる

明治三十三年の夏三合會の徒が廣東に於て革命の軍を起した少し

以前に平山周は香港より廣東内地に入つて深く彼地の事情を調査して居たが或時英領九龍の裏手なる沙魚涌より上陸し惠州府の方向に進んで行くと同行者の三合會徒等は一夜荒廢せる廟の中に漸く雨露を凌ぐ丈の一室があるのを以て一行の旅舍に充つる事とし、て緩くり一酌を催さんと鷄など料理して頻りに晩餐の用意をして居た、さうすると土地の豪家某々等から使が來て三合會徒に向つて云ふには『貴公等は此處に洋人を生擒つて來て居るさうなが、どうか其人を援けて遣つて呉れる譯には參らぬだらうか、若し貴公等が其洋人を殺すとなれば我々土地の者は大變の迷惑を蒙らねばならぬから金が欲しけりや出しても好いから其洋人の命を助けて自分等の方に引渡しては呉れまいか』と飛んだ見當違をして平

山周の命乞に來たとの事である、けれども此を考へて見れば無理も無い事で、清國内地を旅行して居る外國人が盜賊や會徒の爲に殺されると云ふと其地方官の落度となるのでつまり償金を出させられる事になる、然るに地方官は亦其償金の御用を土地の土豪に割り宛てゝ出させるのであるから、若も自分の村で外國人が殺されたと云へば第一に迷惑をするのは彼等紳縉の手合である、始め平山が此邊を通行して居るのを見たる土人等は全く三合會徒の爲に生擒にされて居るものと思て居たので『なあに道連であるから、大丈夫だ心配する事は入らない、そして平山は日本人で洋鬼ては無いから安心して呉れ』と、云つて遣つても、どうしても信用しない『さう云はずにどうか命を助けて呉れ、金は出すから』と幾

度も使が來るので結局平山は『夫ぢや自分が出かけて行つて分る樣に話して來る』と云ふので三合會徒と共に土豪の主なる者の家に行つて御馳走になりつゝ種々と話したから彼等も始めて安心したが、間違ひ噺の多い中にも、支那人から命乞ひをされた日本人は實に世間無類であらう。

岩崎鐵彦褌を盗まる

岩崎鐵彦が例の辮髪胡服にて長江筋を旅行して居ると其風采の怪しげなのと手荷物とては風呂敷包一つも持たないので木賃宿にさへ謝絶されて屢々露天に寢ころがらねばならぬ處から先生沈思熟

考したる末、ハタと手を打ち有爲々々と呼び、支那服には不必要の犢鼻褌を外づして小風呂敷に包み大事に肩にかけて遣つて行くと計略果して其圖に當り効驗頗る著しいのである、してやつたり、之は好い、天下恐らくば此の如き名案無らんと大得意になつて、コミ上げる可笑さを耐へながら幾日か此傳をやつて居ると乘合船の道中と來たから今度は少々大事のお守の置場に困つたが、まゝよと船の窓の處にブラ下げた儘眠つた處何時の間にか泥棒が來て大事な物と思つて持つて行つてしまつたげな。

罰金の抵當に古帽子一つ

香港の公園ではなか〳〵規則が八釜敷くて寸時でもロハ臺の上に假寐をせうものなら直に違警罪で五圓以上の罰金に處せられる、其事を知らなかつたと見えて土佐の萱野某と云ふ男が好い氣持に白河夜舟をきめ込んで居ると早速公園内の印度巡査に捕まつた、夫から巡査の變挺な英語でザット公園規則を説聞かされたる後警察本部に引致されて罰金を出さねばならぬ事になつたから萱野は馬鹿々々しさに堪へず何とかして誤魔化して呉れんものと巡査に向ひ『好し、それでは警察本部に行つて罰金を出さうが、さうすれば御前さんは若干の金が貰へるか』と鎌をかけて見ると占めた、『夫は一文も貰へぬ』と云ふ『それでは物は相談と云ふ事が日本では流行るが、貴公に内處で墨銀一元を遣るからそれで許して呉

れぬか』と云ふと雲衝く計りの大男は髯の中から白い齒を出してエース〳〵と答へた、萱野は此時餘り談判が急に纏つたから又其一元の金が惜くなり愈々出て愈々狡猾に、さて頭をかきながら巡査に向ひ『それでは其一元を出して上げるが今此處には持て居ないから宿に歸つてから持て來て遣る、其證據には此帽子を預けて置く』と昨年内地から冠つて來た麥藁帽子の屑屋も買はない樣な奴を脱て渡すと、佛の樣に正直な印度人は宜しいと承知して呉れたので、萱野は韋駄天の如く走つて逃げ歸つたが、無論其當分の處は公園の方角に出かけなかつた。

醜業婦と仕切られ

西比利亞の日本女郎屋、就中浦汐やハバロフスクでは日本人を客に取らない女郎屋が澤山ある、其原因は遊費が層まつたり、儲けが薄かつたりするからであるが、コンナ邊からして醜業婦は自然に朝な夕な露西亞或は支那の客に多く接し、其中でもより多く支那人に接する者故、從つて餘計支那人の方に親くなるのである、所で又チャンさんの習慣として、本國に立派な妻君を持ち乍ら之を引連れて渡航する事が出來ない、西比利亞に出稼ぎすれば金儲は中々多いが、空閨孤枕は彼等が祖先からの大禁制、我等日本浪人の樣に膝ぶしを抱いて寢る事は到底も出來ぬ、ソコには幸ひ日

本の女郎屋があるから彼等は悦んで之に遊びに行く、遊ぶ事の度が重なれば互に親しくなる、チャンだと言つてホレて見れば餘り惡くは無い、別けて金拂ひは日本人よりも好し、女と見れば可愛がる事も亦一通りぢや無し、コンナ人間を生擒にして置けば此方の爲めには此上も無い好都合、小遣錢に不自由せぬ計りでも結構な事だと大悟一たび徹底しては女郎も亦之に向つて愛嬌を振り撒かずには居られぬ、ソンナ仕儀からデレチャンは益々デレの度を增して先きく必ず身請けの相談を持ち出す、女郎は思ふ壺へハマつたと喜んで早速之を承諾すれば苦も無く前借なんぞは拂つて呉れるコーして支那人の妾に行くのを彼地では『仕切られ』といふのだ、其仕切られて行く時には必ず、百圓又は二百圓の金を約

束金として手に納め、扨萬事話が濟んで裏入をなせば之から先きは女郎共最得意の時代て、愈々自墮落放逸に日を送り、朝も亭主が先づ起きて立ち働けども自分は枕を高ふして床上に新てもかいて居て、十時過ぎにてもなら無ければ中々以て床離れをする所じや無い、ソシテ常不斷着物はネダル、金やダイヤモンドの指輪はセガム、若しも亭主が其請求に應じなければフテ腐れて『私は病氣だから』など云つて亭主を傍へも寄せ付けぬと云ふオツカない始末、又中に氣の利いた連中は月々貰ふた金を諸方に貸付けて七分なり八分なり或は一割なりの利息を取つて財を殖す方法を講ずるのも決して少く無い、先づ西比利亞に居て支那人に仕切られて居る女に、二千や三千の現ナマを所持せぬ者は無いさうだ。

日本人の資本主

此チヤン妾は段々年を經るに隨つて金を貯るが元々日本人てあるから豚尾漢ばかりでは鼻に附いて、聽て否になると見へ、金のあるに任せて往々間夫を拵へる、男の方ても金が目的物だから早速之を承諾すると云ふ鹽梅式て亭主の目を竊んて妙な快樂を盡して居る、其内支那人が本國に飯ると云ふ樣な時には分け前を貰ふて、其儘男の方へ走るし、或は不幸にして夫が財産を貽して死する樣なる事があれば早速其の財産は悉皆遺族即ち妾の手に落つるので、死んだが最後、三ヶ月も立たぬ内に忽ち日本人の間夫と結婚をし

て本望を遂げ安樂な世帶を立つると云ふ、夫から男は女の金を元手として何か一事業を遣つて見るのもあるが失策しても男の方では元々空つ尻だから何の心配も無い、ソシテちと都合が惡るくなれば女を見捨てる丈の事、又た都合が善くなれば善くなつたて見捨る事がある、其處て兎や角云ふた處て元々野合の夫婦てあるから、何處に持ち出して訴ふべき處もない、實に憐れむべき彼等の末路てある。

西比利亞に迷い込んて行ても扨て何も取り附き場處がない、元來無一物て渡つて來たものてあるから、店一つ開かんとしても資本はなく、女郎屋するにも金はなしと困る場合は其の『仕切られ』に愛嬌を振り蒔ゐて甘心を買い、融通を附けて貰ふ、夫れが爲め

に日本人の助かつたものは年來幾許なるか分らぬ、實に日本人の西伯利亞にて事業を起したものゝ資本は、十中の八九女郎屋或は仕切られの手より融通されて居るので、特に彼の有名なる支那人「チーフンタイ」の爲めに昔し仕切られて居た「おサダ」と云ふ女の爲めに資本の融通を附けて貰つた者は今ても彼地此地にごろ〳〵して居る位だ。

仕切られの勢力

此の仕切られなる者が西比利亞全體に幾百人居るか判然とは分らぬけれど、誰ても知つて居る丈けの大概を申さうなれば、浦汐に

於て二三年以前既に三百人から居たと云ふ事、之れは只だ支那人の妾のみであつて其支那人の内てもまだ判明されないのがある、此三百人の外に露西亞人或は其他の國人に仕切られて居る人々を算入したならば少く共百位はあるであらう、如何にして三百人といふ事が判明して居るかと云へば、彼等は殊勝にも仲間の不幸なる『仕切られ』に對して夫を保護せんが爲め慈善會を設立したさうだ、其の慈善會の發端と云ふは、或日本婦人が或支那人に仕切られた處が、其支那人が餘り富有てもなかつたと見え、女の方から同情の涙禁え敢へず縱令支那人ても之ては可憐想だとの觀念より、自分の所持した衣類や古道具迄一切賣り盡して其の支那人に入れあげた處、不運といふものは致方がない者て其内ツイ其支那

人が死んだ爲に女は彌々困窮に陷つて、葬式等は兎に角無事に濟したものゝ、扨其後の方法としてはドーにもコーにも考が就かぬ、止むを得ず事情を浦汐の日本人に訴へた處『仕切られ』といへば同胞人中に於て度外視して居る者てあるから誰一人として其話に乘つて呉れやうといふものが無い、其處て仕切られ仲間が大層同胞人の無情を立腹して、同胞全體が斯な考なら今後決して金錢上や、何かに就て御相談は申し上げぬ、と『仕切られ』中て、慈善金を募集して其の婦人を日本に還したさうだ、夫から以後は之に懲りて將來又た斯の如く不幸なる人があつた時の用意にと、一人一圓宛月々積み立て決して日本人同胞の厄介にはならぬと云ふ大意氣込みで出來た慈善團體の加入者が丁度三百人あつて今ても月々

貯蓄を爲し、會塲を本願寺に定め、絶えず持寄りをして居る所を見ると『仕切られ』も亦中々俠骨稜々たるものである。

『ハバロフス』に於ても『仕切られ』は十二三人も居るが、彼等は寺の寄附金でも、時々折々の募集金でも、二度返事でスグ出す程に物の分りが早い、間には非常に理解力の乏しい者も無いでは無いが之は十分一にも足らぬ位だ、ソシテ彼等は確かに西比利亞に於ける出稼ぎ人としての一勢力を有して居るから、日本人の露西亞人或は支那人の豪商に近づくには乃ち非常に便利なる媒介者である、彼等あつてこそ西比利亞の日本人は今日三千計りにも繁殖したのである、『仕切られ』が常に口にする所では、憚りながら日本のお爲といふ事は始終忘れませんと、然し境遇が境遇故ド

モ根性のひがむ癖が起ると見へ、一寸した事を云ふても忽ち氣に障へ、我等はどうせコンナに零落して居るのだから樣々惡口云はれても仕方がないが、誰某さん達でも本を洗へば皆な私の金を借りたればこそ、今日の地位に成つたのであるのに、今更立派さうな口上を吐て、途中で逢ても知らぬ振りして行き過ぎるのは餘り不人情ではあるまいか』と面の當りやり込められるゝので日本人先生大に赤面して下る樣な事が澤山ある、だから大概の者は彼等の御氣に障らぬ樣に頻りに御機嫌を取て居るが是は如何にも止を得ない次第であらう。

貝加爾湖中の幽靈魚

西比利亞のバイカル湖に奇魚あり、ゴロミヤンカと云ふが、色は純白にして形鱚の如く、常に水底深き處に住み、水面に近かず、勿論水面に浮びもせず、若し誤つて釣人の針にかゝり水上に引き上げらるゝ時は、直に形骸を失ひ、油の樣な形に變ずるといふ意外な譯だから、此魚を知らざる漁夫など偶々之を得るとあれば、魚の幽靈を釣たかと驚き魂消ることか常てある、此奇魚を見やうと思うなら歐亞旅行の際、イルクーツク博物館に行き玉へ其處には此の魚のアルコール漬にしたのが保存されて居る、讀者諸君の中、幽靈魚の初物を食つて七十五日生き延びる工夫する人はな

いてすか、どうてす、一つ召し上つては。

孫逸仙の日本語

逸仙孫文が廣東の革命軍を起して失敗し東京に流浪して居る時或日犬養の邸を訪ひ夫人を呼ぶに『お女將さん』の語を用ふ、蓋し孫文將軍自ら日本語を解し得たりとして得意にやつて居るのてある、然るに其座に宮崎滔天が居たから犬養夫人は『宮崎さん達が孫さんを惡い處に連れてゐらつしやるもんだから……御覽なさい、直に化の皮が現はれて了ふてせう』と劍き付られた、宮崎は閉口し孫は頻りに双方の顏を見比べて不思儀がつて居た。

菊地軍三郎の投げ賃

福島縣人菊地軍三郎と云へば浦潮に於ての名物男であるが內田硬石が同地滯在中に柔道を習ふて較自得する處がある樣になつたから誰でも捕へて投げて見たくて耐らず、去りとて暗黑の辻切りは御法度なり仕方なしに支那人を雇ふて來て五錢銅貨一個やるから投げさせないかと談判した、すると慾には眼の無い奴共だから早速應募者があるので菊地先生揚々として彼等を大道に引張出し、

『好いか背負投だぞ』と云つてドタリと投付け『そら五錢やる』と渡して置て『今度は腰車だ』又ドタリとやつて『そら五錢……次は大外落だ、もう五錢やるからも一遍投げさせろ』と連發

して遣らるゝので支那人は眼が眩み骨身も碎ける樣に覺へて前に貰つた錢も打捨てた儘、逃げ出すと、『そらもう五錢やる、さあ來い釣腰だ、捨身腰だ、さあ五錢だ』と追かけられるから奴さんは命からく後をも見ずに逃げて了ふ、菊地軍三郎は益々面白がつて『今日は十錢丈け投げた、二十錢程投げた』と吹聽して廻るけれど實際は投げられた方で最初に貰つた錢を投げ出して行つて呉れるので左程の散財にもならなかつたと大笑ひ。

安永東之助の健筆

安永東之助は筑前博多の人夙に柔道家を以て鄕黨に知られ天稟繪

畫に巧である、曾て上海に居た頃支那人某は安永の畫才あるを聞き至急を要する大幅の掛圖十幅を依頼して云ふには『支那人に描かせると十日は費るが今急に入用だから二三日の内に遣付けて下さい御禮はたんと上げますから』安永は其下繪を見ると植物花草の圖であつて農務學堂の教科用なのであるから『宜しい、僕が今晩中に描上げてやるが、禮には十五兩呉れ玉へ』と云つて支那人が十日かゝる仕事を一夜に仕上げて了つたのには人皆其健筆に驚殺されたそうだ。

山崎羔三郎の風呂入り

日清戰役の際金州城偵察の任を負ふて虎穴に入り不幸にして敵の爲に慘殺されたる山崎羔三郎等の功蹟は當時天下に聞えたのであるが其逸事などは已に世人に忘れられて居るから今其一二を紹介して置う、山崎が辮髪して支那から歸つて鄕里に來て居た時はまだ戰爭よりズット以前で福岡地方の樣に支那浪人の多い處でも山崎の辮髪が珍らしくて耐らない、それチヤン〳〵だ支那人だと何處に行つても騒がるゝがうるさくて山崎は絶へず高帽子を冠つて室内でも決して脱がなかつたは好いが風呂に入るときも矢張り冠つたまゝで這入らうとすると傍の人は山崎が帽子を脱ぐのを忘れて居るものと思ひ『あなたは帽子が……』と注意して呉れたのを山崎は兩手を以て帽子を押へ『イヽエ』と云つて狼狽しながら

矢張り其儘に入浴した。

國を取る商法

此も山崎羔三郎の關係したお話で、山崎が楊子江を溯つて各地の視察をせうと思つて其資金を得る爲め博多の寫眞師服部某を同行して行つた時の事である、山崎は元來金を儲ける目的でないから寫眞の方で少し金が溜れば直に攫み出して諸方の探險と出かけるから何時迄經つても寫眞屋の方では儲かる譯がない、後に服部は博多に歸つて知人に向つて曰く『ふてえ、山崎さんは國を採る商法ぢやもん、自分な金さへ儲けりや好かとばつてん、元來目的の

違ふとる』と山崎の豪放と博多ッ子の洒落とは此一言にして見るべしだ。

丸橋女醫の投藥

上海にミス丸橋と云ふ日本の女醫があつた、或時支那人の一少年が急激なる腹痛に罹つたので早速驅付て來たから例に由て例の如して丸橋さんは下劑と收斂劑を與へて無論別々に服用すべき時間をも示した處が支那人の方は又奇効神の如き洋藥であるから一度に用ひたらば猶更利くてあらうと思つてグットと遣つて了つた、すると腹の中ではさあ大變て糞が出やうか入らうかと大混雜を始

めたので少年は一層の苦痛を感じ七顛八倒して泣き叫ぶから、此は何でも日本の醫生が毒藥を盛つたのだと大騒ぎをして丸橋の所に突掛つて行くと何がさて聞て見れば笑ふにも笑はれぬ支那人の馬鹿さ加減に之には付ける藥が無いとミス丸橋も大に嘆息したさうだ。

西村天囚耳を剪らる

天囚居士が南京の妙相庵に寓して居た時の事、當時此處に同居して居た農商務省の研究生で安永東之助と云ふ猛者が居たと思ひ玉へ、すると或時天囚居士散髪がしたいと云ふと安永はヂヤ僕が

刈つてやらうと、鋏を採つてチヨキ〳〵と始めたが早速の無調法天囚居士の耳の縁を二三分程切り落した、西村君失敬した之れ丈け切り落いたやねえと其切屑を一寸摘んで見せて直に捻りクシつて床の上に捨てしまつた安永の無遠慮に西村天囚怒りもされず滋面作つて居ると幸ひの事佐々木醫學士が南京に滯在して居た時だから此珍事を聞付けて飛んで來ながら、此は繼けばつがるからさう捨んでも好いてずと叮嚀に拾上げて燒繼ぎ屋も宜しくと手術を施したので片輪にならずにすんださうだ、由來天囚居士の豪傑連を恐がる事一通りならずとぞ聞ゑし。

上野靺羯の露語と俳句

上野靺羯西比利亞に在る事前後三年其間露人と同居せる事なども
あつたれど覺えた露語はタッタ一語てボジャルイスタ（どうぞ）
と云ふ事に過なかつた、之れてずん〳〵と何處えても獨りて旅行
する勇氣には、人皆慄いたのてある、其旅行に就て思ひ出したが靺
羯居士或る時のこと、

今日よりは野山の旅か草まくら
草枕とは云へ濡るゝ露もなし

と吟して浦汐より西比利亞内地に向つた、其草枕と云ふのは實は
讀んて字の如して枕の中に枯草を詰めたのてあるが此枕は露西亞

人の旅行には必用の携帶品てあるから靺羯の當意速妙は當時頗る
人口に膾炙したさうてある。

關屋斧太郎の鶴打ち

金澤の士關屋斧太郎は頗る奇行を殘して此世を去つた先生だから
其逸事談は一二にして足らぬのてあるが一つ朝鮮に於る有名なの
を話さう、關屋が京城に居た頃程遠からぬ田舍に非常に鶴の群れ
て居る處を發見したから今年の新年の飲料を稼くのだと云つて友
人より上等の獵銃を借受け喜び勇んて行つて見ると、成る程居る
〳〵數十羽の丹頂の鶴が恐れげも無く遊んて居て人の覗ひ寄るを

知らぬ樣子である、占めたり今日一日狩り暮せば二ヶ月位を遊ぶ丈けの金儲が出來る哩と嘗しさの餘り寄せて行く內に銃口を堤に突かけて土が詰つて居るのも知らず一發に十羽も斃すつもりてズドンと遣ると、これは如何な事銃身は忽ちに破裂して了つた、そこて折角の正月も出來ず友人には三十圓許りの損害をかけるし目算がラリと外れて大閉口して居るのを口善惡なき同胞の居住民は目的の外れる事を關屋の鶴打ちと云ふのて當時一の流行語と爲つたさうな。

骨折り損の草臥儲け

末永嘯月や平山古研が曾て遞羅に渡つた時、其國の形勢を見て思ふには、此の如く國の名あつて其實なき江山は、天の吾々に與ふるものだ、棄てゝ置ては罰があたる、宜しく日本の農民を移して茲に理想の淨土を造るべし、去るにても日本の農民が此地に適するや否や試みに先づ自ら農業をやつて見やうじやないかと、之を當時の農商務大臣スリサック氏に謀つた、氏は日本人贔負てあるから大に喜んて、君等が自から農業の試驗をやるなら鋤鍬は勿論水牛も二頭貸してやらう、田地も貸してやるから一町ても二町ても作れる丈け作つて見給へ、小屋は田地の中にあるから勝手に住み給へと、何から何迄世話して呉れた、そこで嘯月と古研は其小屋の中に這入つて、田を耕して食ひ、井を堀つて飲む、之も亦聖

帝の德だと、其小屋を帝力庵と名づけ、二頭の水牛は遐羅の二大河に因みて一を湄南、他を湄公と名づけた、先づ土人の加勢で苗代に種籾を下し、夫から徐々と田を鋤き始める、田を鋤くには一人が水牛の鼻を牽ひて前に立ち、一人が鋤を秉つて後からついて來るのである、嘯月や古研は田を鋤く道を知らぬので、水牛が馬鹿にして中々言ふことを聞かず、畝が弓の如く曲がつて仕舞うから、一人が前から鋤き樣が惡いと苦情をいへば、一人は後から牽き樣が惡いと小言をいふ、前と後で、毎日喧嘩ばかり遣つて居つたが、夫でも三週間許りの中に三反餘の田を鋤いた、其内に苗も生長したから之を田に植え付けて日々に青々として色のついて來るのを樂んで居る、苗を植え付けた後は草も取らず、肥料も入れ

ず、水は一切降る雨任せで、何も手が入らぬから、或日古書を引出して讀み乍らトロ〳〵と晝寢をした、晩景目が覺めて見ると大變、水牛先生がノコ〳〵小屋から出ていつて、三反餘の苗を盡く食つて仕舞つて居る、嘯月と古研とは怒るどころでない、是が骨折り損の草臥儲け、しやうが苗なとベソをかいた。

齒磨粉の妙藥

文明國人が野蠻國を旅行する時には自己の用心の爲めに皆一と通りの藥を用意し行く、そして蠻人の病者を見ると之を惡んで遣るので、蠻人は文明國人を見れば必ず藥を持つて居る者と思つて居

る、或時日本人某が朝鮮平壌の奥に逗留して居ると、足に非常な怪我をして腫み腐つた朝鮮人がやつて來て、どうぞ藥を呉れろと頼むけれども某は藥を持たぬので之を断ると、其朝鮮人は中々聞き入れずメソ〳〵泣いて、痛くてたまらぬどうぞ助けて下さいと洋服の裾に縋り付て三拜九拜して頼む、某は大に困つたが、不圖思ひ付て、ヨシ〳〵夫程頼むなら藥を遣るが、此藥は中々高いものだから容易には遣れぬ、此藥をやる代りには、己が朝鮮を旅行する間は荷物を擔いで伴をするかと尋ねた、處で其朝鮮人は、モウ〳〵此怪我さへ治れば朝鮮旅行中どころでない、一生でも大人の下僕になりますといふから、某は先づ水を取寄せて能々腫を洗ひ去り、荷物の中から鄭重に齒磨粉を取出して其後に振りかけ、

木綿を引裂いて繃帶して遣つた、さて翌日になると其朝鮮人がやつて來て、御蔭で痛が大に治りました、どうぞ又あの藥を付けて下さいといふから、前日の如く洗つて齒磨粉を振りかけて繃帶して遣つた、其後數日の間同樣にして遣つた處が怪我は全く治つて仕舞つた、そこで朝鮮人は驚いて此は誠に天下の妙藥である、既に怪我が治つた以上は御約束の如く御伴を致しますと、某が朝鮮旅行中は荷物を擔ふて伴をした、齒磨粉も時に天下の妙藥となるものだ。

澳門の翻攤賭博

澳門の翻攤といへば、フンあれかと御承知の公許賭博で、澳門の葡萄牙政廳は殆ど其爲に經費を支へて居ると云つても好い位である、日本人の旅客が此處に遣つて來ると必ず一度位は其門を覗かない者は無い、どんな鹿爪らしい紳士も、色氣と賭博根性の無い者は無いから、此邊迄來れば內地の樣な面倒なる社會の制裁は無し、懷には多少の小金もある處から、眞の娛樂半分に手を出して見ると、向ふの方ではチャンと商賣道に由て賢こして、始の內は二十元三十元と毎日少々宛儲けさせて遣る、其法は玉突臺の小さい樣なのに蓆を敷き詰た處に、磨き上げた一文錢を小山の如く積んであるのを一握り丈け掴み出して眞鍮製の蓋をする、其錢の數を四個宛取去つて、一から四迄の內幾個が殘るかを當るので、假

に一元の金を四にハッて置てチョード四が殘ると、一の四倍より一の二割五分の手數を引去つて三元七十五仙を得るのである、若し夫が十元をハッて居たのとすれば三十七圓五十錢を得る譯て一度當るとなか〳〵面白くて止められない、そこて始の內は少々宛儲けさせては嬉しがらせて置くが、客人が慾張り出して、一度にセシメて呉れやうと、百元も五百元もハッて來ると、其時一度に取り込んでしもう、此手に罹つて見事數百金を絞り取られて大事の旅費迄も無くした先生が、我邦の有志家とか志士とか云ふ連中にも多い、但し其名前丈は預り置く。

日本人は白んぼだ

サンチャゴー港に日本商店があるが土人は巧に日本語を解して、通常の會話は容易に話しすることが出來る、或時「サミル」なる土人の突飛娘が此店に來りて頻りに日本語を以て話して居る時、店員關某といふ者が戯れに「サミル」汝の色は我より黑い、日本語では黑き者には「黑んぼ」といふと話したら、「サミル」頻りに「クロンボ」を口に唱へて悦んで居た、ヤガテ店員に尋ねた、日本人には何と云ふか、關は之に白んぼと云へと教へた、サミル歸つて二三日の後、又來り、余等晩餐の際、椽端に肱杖し微かに「白んぼ」を稱ふ、其聲甚だ奇に聞え、思はず抱腹したことがあ

る、突飛娘は之て日本人の歡心を求めたりと思ふて、夫から同輩に逢ふ毎に、日本人に逢はゞ白んぼといふべき旨教へ傳へ、新會話語茲に出來て爾來日本人は如何に色黑き人ても白んぼと云はるゝ樣になつた。

大蛇船の進行を止む

カロリン群島の海中、ポツペ島の北方に方りて無數の小島が羅列して居る、此海中に於て百九十噸の滊船てあるが、南洋貿易船のインチャン號が馬力盛に進行する際遽かに其進行の止まつたことがある、海中には別に暗礁のあるてもないから、水夫は甚だ不審

と思ひ、フト船の舳の方を窺ふた處が、其頭四斗樽大の大蛇が、船の舳を横口に啣みて船の進行を停めたのである、之を見た船員は恐れまいことか、非常に狼狽して暫らくは爲す所を知らざる有樣であつたが、爰に氣のきいたる一人の水夫は直ちに蒲團を圓めて之を海中に投じたれば、大蛇は忽ち船を放ちて蒲團を呑まんとした、其瞬間船は非常の動搖を感じたが此際に乘じて船員は勇氣を鼓舞し、全速力を出し漸くにして大蛇の危難を免るゝことが出來た、當時目擊した者の推測に依れば此邊の海底は大凡四尋であるが、大蛇の尾は其首の顯はれたる所より丁度三四十間とも覺しき彼方より五六尺も露出して居つたから、先づ長さ五六十間にも及べる大蛇と言はねばならぬ、然して其齒の船に印せし跡は、直

徑二寸に超えたるもの四本も認められた。

職工熊

ウラル山中に在る盛大の某鐵工所に一匹の熊を愛養して居る職工があつた、彼は勞働中も熊を傍より離さず折々は自身に輪轉せしめつゝある器械に熊の手を持添へて加勢をさせ居たる處悧巧なる熊はいつしか器械輪轉の術を覺へ終には職工の手を持添ふる迄も無く獨り其手を以て器械を動かす樣に爲つたから、飼主の職工は爾來自ら勞働するを止め、仕事一切を大力の熊に打任せ自分は食事時間に熊の食料を持來る丈にして居たのであるが、熊の大力は

却て職工よりも器械の運轉に適當して居ると云ふ事が製造所の主人にも聞へたから熊殿は間も無く此製造所の立派なる常雇ひ職工となり上つた、熊は此榮譽を荷ふてより以來食事の時刻には食堂に入るを許され其一隅に定まつた椅子を與へらるゝ事と爲つた、そこて彼は傲然椅子に倚り毎日外の事務員等と共に卓を推して食事するのを、無上の愉快と心得て居るらしかつた、毎日朝晩夕の食事を報する鐘かガン〳〵と響き渡るや否彼は直に其仕事を拋り捨てゝ慕地に食堂に走り込み其席に就く一點は決して人に後れを取らないのみならず、茶呑み時にも亦第一番に駈付ける事など毫も人間と異る所が無い、若し食事の時肉一皿にても人間の職工より少ない事などあれば熊公決して承知しない、之を與へらるゝ迄

は山の如く泰然動かずして不言の中に權利主張の色を表はすのである、斯る不思議の熊であるから其話は次第に傳播して今はウラル山中の職工熊とて露西亞にては誰知らぬ者も無い。

喇嘛寺院と日本の古器物

去る頃日本人某がイルクツスク府附近の喇嘛寺を見物して居た處が、不圖佛像の傍に日本の古器と覺しき尉と媼の床飾りの極めて巧妙なる彫刻の置物を据へあるを見いぶかしき餘りに手に取つて能々改め見れば其裏には正しく日本の文字にて藤原某之を造ると刻み込んであるから其傳來の次第を寺僧に尋ねたれば寺僧は單に

昔支那より持ち來りたるものと言ひ傳へらるると答へた、依つて察する所右は數百年前日本より支那に、支那より又喇嘛教徒に轉々したのであらうが兎も角遠征の孤客が旅中日本の古名器を數千里の海外に發見するのは思ひがけ無くも亦ゆかしき事である。

源氏の紋印蒙古に在り

成吉思汗が我源義經の變名なりと云ふ事は屢々吾人の耳にする處であるが、其事實如何を確認する事は出來難しとするも尙現に蒙古の喇嘛教寺院には到る處源氏の紋印と同樣なる笹、龍膽の紋を附け居るを見るのと又同寺院には我國同樣松竹梅の飾附を爲すを見れば彼我の間には何等かの關係があるに相違ない、學者宜しく研究すべしだ。

馬賊の旅行保險

滿州に於る馬賊の勢力は今猶極めて盛大で、露人も屢々その制御に苦しむ所である、其根據地とも云ふ可きは朝鮮境上の長白山脈にあつて時々其處より出て來ては民家又は商隊を脅かし甚しきは貿易の通路を遮斷して之が爲に貨物運送を中止せしむる事も珍らしくない、去れば滿州には必要上、齊々哈爾、普蘭店、愛琿、琿春の各要市に商業保險事務所の如きもの設立せられ之をシンヅユ

イと云つて貨物、貨車、官吏、商人の旅行等の敎導に任じ保險貨物に對する事務上の責任を負ふ樣に爲つて居る、故に人若し保險の必要があれば其他の事務所長の許にて保險料の定額を支拂ひ之と引換に一種の旗と領收證とを受取り其旗を貨車又は商隊の先頭に指立てゝ行く時は途中決して掠奪の禍に罹ることが無いと云ふが、然るに豈圖らんや此保險の事務所長は馬賊中の大親分にして斯かる手段に依り安臥して其福樂を恣にして居るのである。

新羅朝の三大遺物

新羅朝は朝鮮に於て最も威武を輝した時代で特に新羅民族は日本

民族と同樣であつて歷史上我との關係尤も深いのである、然るに新羅の古都たる鷄林の山河は今や山は禿げ水は枯れて四顧荒凉轉た其盛時を忍ばしむる、此古都は釜山の我居留地を距ること北東僅に十七里であるが爰に當年有名なりし器物の存留するものが三個あつたさうだ、其一は石造の大龜、二は玉にて作りたる横笛、三は亞細亞三鐘中の一と稱せられた大鐘である、其中第一の大龜は新羅滅亡した日に偶然歩み出して海中に入つた儘還つて來ず、第二の横笛は今尙國寶として守護の役人を附けてあるけれ共高麗朝に入つてから後は鳥嶺以西に持ち行きて之を吹も復鳴ずと傳られ、第三の大鐘は新羅王が工人に命じて之を鑄らしめた時撞を善くせん爲にエミンレイと云ふ少年を殺して其生血を塗りたる物で

あるから之を撞く時はエミンレイと響いたとの言ひ傳えがあるが今は此鐘も路傍に据へ置かれたるまゝ其古形を存する丈てあるとの事てある。

朝鮮の日本左衛門

或る旅行家が先頃平安道の中和に行つた時其土地の尹氏と云ふ人に出逢つた、此尹氏は日清戰爭頃迄は平安道中第一の富豪てあつて財産も彼是二十萬兩計りもあり其名遠く半島の八路に響き渡つて居た、然るに戰爭後に至つては悉皆零落して仕舞つて今と成ては誠に憐む可き境涯に陷つて居る、ナゼ其樣に不意に零落したのかと尹氏に聞けば實に氣の毒の次第てあるのだ、彼は答へて云ふやう『丁度日軍が平壤の攻擊をして居る頃、一人の日本人と自稱する者が六人擔ぎの驕に乘り威風堂々として拙宅に來り、主人は居るかと横柄に家僕に尋ねまして其在宅と云ふ返事を聞くや否、直に自分の居間に押通り扨云ひますには、吾輩は日軍兵站部附の御用商人てある、聞く所に依れば貴殿は平安道第一の金持と申すことぢや、今我陸軍は遠路の進軍に由つて輸送方頗る自在ならず平壤攻は之が爲に夥しき困難を感じて居る、就ては只今急に貴殿の蓄財十萬兩計り借用が致し度い、拙者は其用向の爲に官命を帶て貴殿を尋ねた次第て御座る――と初手から金の談判てあるから自分も先の樣子は分らず少しく狼狽して、タツタ先頃迄金は庫に

入れてありましたが、商業上の取引の爲めッイ今し方支拂ひ出して仕舞ひましたから誠に御生憎の所へお出に成ましたと申したれば、其日本人は大喝一聲默れと叫んで又穩かに話を續けて云ひまするには、貴殿が金を貯へて居ることは聞た計りぢや無い、豫て詳しく調べが付て居るのだ、夫を何かと胡魔化さうとするのは貴殿の身の爲め宜くあるまい、且つ此度の戰爭は十が十迄日本の勝に成るは始より分り切つて居ることだ、そこへ貴殿が軍費として金十萬兩も貸渡せば實に貴殿の名譽では無いか、獨り名譽計りか戰後にもならば貴殿は此因緣を以て日本の朝廷からも大層な恩賞に與り高位高官をも授けられんは必定だ、今こそ忠義の盡し時だから早速穩便に十萬兩貸渡されたが宜からう、而しながら自分は見

ず知らずの人に十萬兩の大金を只渡まするのは後に何樣な好い事があつても不安心に思はれるから矢張金は有りませんと剛情に答へた處が日本人は聲荒らげ、然らば汝は朝敵と成て迄も金を吝む積りか、不都合千萬な奴だ、日本の進軍は總て汝等の爲にするのだぞそれに尙彼是申すならば一刀の下汝の身首所を異にせしむるが夫でも宜いか、と忽ち腰の刀に手を掛るから自分もビックリして、まあ〳〵御待下され金の事は宜しいから番頭に出させます、ともう致方が無いから金庫へ案內させました處其人は庫に在り切りの金約十萬圓を一文も殘らず持出して人夫をして悉く馬の背に積ませたる後一枚の名刺を自分に與へ――此が拙者の住所である から貴殿に入用の時分には此名刺を持て受取に來れば何時でも渡

す、此が即ち其證書代りである――と云つたまゝ何處へか立去つて仕舞つたてす、後に其名刺を見れば京城在留某としてあるから二三月經つて世も穩かになつた頃自分自ら京城に上つて其人を尋ねたけれど一向知れぬ、貸した金は大金だし自分の鄕園は當時大分軍人共に荒されるし之を取り返さねば到底安全に祖先傳來の邸宅に住む事が叶はぬ程ゆへ自分は血眼になつて四方を探したけれど其人の在家は終に知れず、自分はガッカリして夫から病人の樣になつて故鄕に歸りましたが今日生活の困難は實に之が爲てあります、世の中には大分横着なユスリカタリもありますけれど敵味方交戰の最中にこんな太袈裟の事を遣つた者は少ないてせう、なんとヒドイ奴ではありませんか』と此話は正に某旅客が聞た處で

あるから事實に相違ないが夫にしても十萬兩持逃の儘今に誰の所爲か發覺せぬ所は誠に運の好い惡黨ではある、但其大膽なる所業から見れば到底御用商人などの仕事ではあるまい、日本人の假聲を遣ッた何奴かの化物であらう。

大澤龍の人物評

人物評を以て同人間に知られたる鶯臺大澤龍次郎は肥前平戸の人である、今は跡を草澤に晦まして人其在る所を知らないのてあるが、鶯臺が曾て井上雅二に與へて當世の豪傑を短評した小冊子は今猶人に秘藏せられて一話柄と爲つて居る、彼は毀譽褒貶縱横自

在の筆を揮つて居るが其中で尤妙として人を首肯せしむるものは其寸鐵殺人的の最短評てある、其一二を擧ぐれば、平浩は市井の雄なりと斷じて次に松村雄之進は市井の勇なりと云ひ奈良八は市井の徒のみと嘲り鈴木天眼を評しては、彼は『氣を負ふて社會の一隅に嘯く者なり』との天眼が活世界の發行に際して自稱せる文句を引用して直に其評言に代へたるが如き尤も人口に膾炙して居る、而し流石の大澤も頭山滿の評丈けは縷々たる長文章を作つたが秋毫も其非難を試みなかつた、

内田硬石の好謔

内田硬石が西比利亞旅行中貝加爾湖を船にて渡る折の事誤つて一發の放屁をした、此時同乘の連中は悉く露人なれば孰れも顏を顰めて笑ひを忍んて居る樣の餘りに氣の毒であるから内田は例の重々敷口調にていと眞面目に『ボワーショム、カーク』と突然の問を起したので今迄眼と眼で物を言つて居た船中の同勢は一時に哄然として大笑し『日本人は洒落が旨い』と云ふ聲が隅々に聞えて居た、其ボアショム、カークと云ふ意は『貴國の國の言葉では今の音を何と云ひますか』と尋ねたのであつたとさ。

次も矢張りその話だが今度は露人の放屁を一發お聞に入やう、内田が露國の某市街を散歩して居ると其先に行く一人の巨漢があつて後に人の居るのを知らなかつたと見え放屁一發其音頗る大きか

つた、内田は透さず、ブッチエヅラーローウオ（健康にあれ）と叫んだので巨漢は大に驚いて後を見ると外國人であるから笑つて、ワームトーゼ（貴君も左樣に健康である事を祈る）と謝したさうだ。

或時内田がペヾロフカより浦汐に歸る途中の鐵道にて露國の士官と同車して談ば遂に戰爭の事に及んだ、士官の云ふには、不幸にして日露一朝開戰するとなれば貴國の勝利に期す可きや否、と傲然稍輕侮の色が見ゆるのである、内田は平氣に答へて、無論です、と言放つたから彼は顏色を變じ語氣荒く再び問ふには、勝算は如何です、内田は澄し切つて、毎年日本に流行する虎列刺病毒を運搬して來て此地方に撒散す丈の事です、と答へたので彼は始めて

其かつがれたるを知り呵々と大笑して、妙々計、實に貴國の人には叶はない。

獨貴味の鯨

朝鮮の元山から五里計り南で獨貴味と云ふ村に一の小さい灣がある、三四年前の事其灣に一匹の鯨が入て來たから獨貴味の村民は早速其狹い灣口を堰止めた、元來朝鮮では鯨は非常に貴いので村民は大喜びする、之を聞た官廳よりは其收獲を見込んで重税を申し付ける、隣村よりは祝ひに來ると云ふ騷ぎである、流石朝鮮人だ、そこで其夜は村民一同は隣村民などを招いて先づお祝ひの大

酒宴を張り、緩る〳〵人を京城に遣つて鯨寶買の交渉を始めさせなどして、其使が約束が出來て歸つて見ると、鯨は何時の間にか堰を破つて逃げて仕舞つた。あはれ、喜んだのは束の間、鯨は捕れず殘つたのは重税と宴會其他の費用、是から繁榮と思つた村は却て大の疲弊を來したとの事である、禍福の轉變常ならぬは塞翁が馬と善く謂ふが是は獨貴味の鯨である。

國事探偵の誤認

相反目する人と人との間に疑心暗鬼の事柄が多いと同じく國と國との間にもまゝ其例があつて抱腹絶倒する事がある、露西亞で折

〳〵日本の旅行者、書生、勞働者、商人等を國事探偵と見誤つて警察官が大騒ぎをやらかす事があるが日本も之と同樣、露西亞から來る者は何でも變に感ぜられ左も無き人を警吏がウルサク跡を附廻して其人に迷惑をかけ又は不愉快の念を抱かしむるのみならず使はぬても宜い機密費を安に費消するのだ、曾て正直なる露西亞の一商人が新潟から上陸したら直ぐ此疑を掛けて遙〳〵東京迄追つて來た、なんと馬鹿〳〵しい話では無いか、又も一人、西比利亞で金儲けをして歸朝した我同胞が金の使い樣が荒いと言つて是亦露政府の間者ぢやと斷定されたことがある、可愛さうに多年知らぬ他國で苦勞するのは外では無い唯故郷へ一度の錦が飾りたい計りだ、夫をば歸るや否、賣國奴の惡名を附するとは誠に早や

情け無い次第と言はねばならぬ、是ては一層乞食に成つて歸る方が國への忠臣と成る道理ては無いか、あきれたものだね。

天子に姓無きは如何

清韓人は往々我邦の旅客に向つて貴國の天子の姓は何と云ふかと問ふことがある、そして此問に對しては誰でも一寸返答に狼狽するのである、而し是が畢竟日本の國躰が尊い所以だから、斯樣に答へて遣れば好いのだ、『汝等は日本の天子に姓無きを怪むかも知らぬが姓と云ふ者は何處の國でも本と天子から賜つた者で臣たる者の附く可き者だ、天子には決して姓は入らぬ、然るに今日諸國

の天子に姓のあるは皆其先祖が人臣から經上つた證據で日本ばかりは千古萬古天子の系統で無れば天子になられぬから今に天子に姓が無いのだ』と。

人間の買賣直段

奴隷賣買の現に行はれて居るのは遠い〳〵亞弗利加の野蠻界ばかりだと思つてる人が多い樣だが、ナニ直ぐ西隣の朝鮮支那の方が夫よりもまだ盛んに行はれて居るのだ、然るに夫が今の今まで世界の人道問題とならぬのはナント不思議ではあるまいか、先づ一寸支那の市場に行つて見給へまだ乳離れをしたかせぬかの女の子

を大の男が取つ摑まへて大聲を揚げ、さあ三兩だ、三兩五兩だ、五兩、六兩、七兩、十兩と競り賣して居るでは無いか、夫をば富豪の徒が一度に五六人も買つて行つて養ひ育て十年も十五年も丹精して磨き上げ、其中の美貌の者を自分の妾にして外は他人に賣り飛すと云ふ鹽梅式は丸で鷄や豚の取扱ひぶりと同樣だ、朝鮮では市場でそんなに賣買はせぬけれ共其動物授受の姿あるに至つては彼此何の擇ぶ所が無い、大低京城で用に立つ女一人歳十六七から三十まで位の價値が十七八圓から四十圓内外の者だ、價が安ければ固より女も醜いが時には十八圓でも中々美人を得る事が出來るし又四十圓以上にもなれば頗る付の者も居る、勿論之も時の相場で折々高低はあるけれど其多くは米價の變動に關係を持て居る

樣だ、即ち米が高くなれば人間が安くなり、米が安くなれば人間が高くなると云ふ樣につまり生活の樂否に依つて價の相異を生ずるのだらうと思はれる、それだから饑饉歳になると又一層甚いもので女の價が益々下落しドヤノツマリ一圓二圓でも賣りに來る奴が間々あつて最もヒドイ奴は自分自らロハて身躰の押賣をも仕兼ぬ程である、此時分には四五歳の者になると二三十錢でも買ひ得らるゝ現に日本人中錢儲の爲め饑饉歳に田舍でワザ〳〵此等の女兒を買入れて次第に育て上げた後目的通り人の妾抔にしやうとして居る者が或る處に居るとの事だ、人間萬事慾の世の中と云はゞ云へ之は又餘り殘酷では無らうか、而し此等の女兒賣買は全國民孰れも平氣で見て居るから買つた者にしても不用になれば直

ぐ賣捌く道がある、そして賣物がさう老ぼれさへせなければ元價て賣る事も六ケ敷く無いと云ふはトント重寶な品物ては無いか、又此品物の賣れ行き工合を見るに北方の方が南方よりは盛んな樣て其賣價も高い樣てある、其理由は外ぢや無い北方になればなる程人口が稀薄て女が寡少てあるから女の必要が多いからてある、從つて北方ては南方から見ると一人の女にザット十圓近く價が高い樣に思はれる、そこて南方のヤクザ女日本て云はゞ天草邊の生蕃組の樣な者が北方に向て年々大分輸出せらるゝのだ、扱此賣買に附せらるゝ女は其四方に賣り飛ばさるゝことに付幾分か其身の不幸を嘆ずるかどうかと云ふに、それは此世の定業として少しも悲しむ色は無い、到る處勞働或は娼妓の動作をなし或は亭主を持

ち子を生んて喜んて其天命に終るのてある、彼等に苦勞の少ないことは却つて自由國の我々よりもまだ少ないかも知れない否彼等にはトント其感覺があるやうには思はれるぬのだ。

鶴の飼養法

日本ては鶴を飼ふには鰌に限るの野菜を用ゐるのと御大層なことを云傳へて居るけれど鶴はそんなに食物の撰り嫌ひをする上品な禽類ては無い、朝鮮て之を育つるには御飯の殘りが第一の給養糧食て、それから鳥類の腸や魚類の不用部等を時々は食はせるのてある、そして鶴は夫て以て充分に生育するのてある、其食物を撰

ばぬ事に就ては禽類中の豚とも云ふ可き程惡食性を持て居るのを今迄日本人は靈鳥とか何とか云ふ所から無闇に之を尊びて祭り上げたので偶々甘い物があつても餡の外には滅多な物は食はせぬと云ふ事にしてあるので鶴こそイヽ難有迷惑である、序に云ふ朝鮮では活きた丹頂の鶴一羽に付安い年は一二圓、高い歳が七八圓、平均四五圓位で何時でも買ひ得らるゝが、買つてから之を飼ひ馴らすには一寸月日を要する者で、又馴れぬ中は同類相屠る癖が頗る甚く弱い者は皆強いのに殺されて仕舞ふ、其邊は到底靈鳥らしき所が見へぬ者だ、そして籠などに入れてあるのをウッカリ覗く時は折々人の眼玉を嘴で衝くことがあるから中々嶮呑だ、而し稍暫らくして人に馴るれば性質も次第に穏當になつて、豊かな鳴聲

をして毎時定時に運動する所などは隨分可愛い者である。

鹽は山から堀出すのを知らぬか

流石に露西亞は大國である、西比利亞の眞中、イルクーツスクの田舍に至ると未に鹽水を知らぬ者がある旅客若し彼等に向つて海の水は鹽水だと語つたならば彼等は直に斯う云ふてあらう『馬鹿を云へ海の水に鹽氣があつてたまるものか海は河水が集つて出來た物では無いか、河水に鹽氣があれば兎も角さうでない以上は海に鹽氣のあらう筈が無い』と爭ふから、然らば鹽はどうして取るかと尋ぬれば彼等は平氣で斯う答へる『貴公も智惠の無い奴だ、

鹽は皆山から堀出すのを知らぬか』と。

犬の浮浪罪

露西亞では決して飼犬を犬殺しにシテ遣られる事は無い、若し飼主の知れぬ迷犬などが居ると警察の役人が手頃の棒の先に綱でワナを作つて、向ふて來る奴を一寸頸玉に引懸て釣てしまう、それを箱馬車の中に打込て犬の留置場に連て行く、そして犬殿は浮浪罪で以て一週間も拘留さるゝ、偖飼主の方では内の熊が居ないと、か、ニコライが見へ無くなつたが屹度拘留されて居るだらうと、舌切雀を探す樣にして此留置場に來て見ると犬は其處で喰ふ物は

不足無く食て痩もせずに居るから、番人に錢の二三十哥も與れて連れ歸る事が出來る、然るに一週間經ても迷子否、迷犬の引取人が無いと、愈々宿無し野郎と決つてしまうから市街の外に連出して撲殺する。

喰付かれると三十圓

次も失張り露西亞の犬の話だが、彼地では番犬と云つて夜中家屋の周圍を警戒さするのがある、夫は晝間は決して人を見せない樣にしてある、そこで見當り次第誰にても喰い付く樣に出來てるが其代り誤て家の外に飛出す事があつて通行する人に喰ひ付けば飼

主は過料として大枚銀貨三十留を支拂はねばならぬおゝ最低額が、此であるから伺主を用心しなかつたのがわるかつたは居ないのである。

鴉の本場だもの

東京朝日の池邊鐵崑崙と、大坂朝日の西村天囚とが上海より蘇州見物に行た時、有名なる楓橋の下に舟を繫て、わざ〳〵夜泊の妙味を實驗せうとて鴉屈なる屋形船に紹興酒を積込んで出かけたは好いが、蘇州の殘月水よりも淡く、烏が啼くの啼かぬのゆえ、八釜しく過ぎて風流はそのち除けの、熟眠が事の澁面になつたゝ。

又土田黑潮氏國府犀東が嘗て上海の大東汽船會社の小蒸汽船で蘇州に向ひ、夜が明るを直に胡蘇城外に着て見ると、居るは〳〵、鴉が居る事を云つたら、動てる物は皆鴉だといふ位だから黑潮頻りに感心して或程此れ丈の烏が居ればマグレものが夜中啼き出すに相違ない、シテ見ると月落烏啼の詩を無理に故事付けた、張繼といふ詩人は蘇州の通り掛りの旅客で、烏の本場たる事には氣が付かなかつたんだろう」と笑つたそうな。

死んで居れば一圓

楊子江筋で士左衛門を見付けて引上ぐると官が銀一枚を支給する

げな、それが活て居るのを助けると御褒美がタッタ二十仙である
から、半分死にかけて居る半土左は助ける事は措て、殺してから
眞正の土左として引上げる奴がある、それて人の命が僅に八十仙
の價とは安いものてはないか。

乞食橋

橋といふと支那ても矢張乞食の寢處の樣になつて居るが廣東の或
處では、何時ても乞食が來て寢て居ては死ぬる處がある、それを
廣東人は、前に死だ奴の怨念が殘て居て他の同類を誘ふて來ては
死なせると信じて居るので、腐た大根の樣な手足が菰の下から出

て死にかゝつて苦んて居るのを見も返らない、況やまだ夫程にな
らぬ中には一文の錢を投與ゆる者がない、然るに愈々往生安樂を
遂げて終ふと云と、其橋の在る町内ては、町費て以て形計りの棺
を做らへ、兎も角も葬送をしてやるので、人の命の八十仙と對照
して見れば餘程面白い話てある。

虱て着物が這ひ出す

支那通の中島裁之といへば知らぬ人はないが、先生が日清戰役以
前に風雲的健兒として支那大陸を横行せる時、北京より陸路遙々
と大庾嶺を越へ、粤東の省城より葡領澳門に現はれ出たる時の事

である、勿論辮髪胡服せる裁之の風采は何處から見ても支那人の無宿者で、穢くるしい有樣をしながら別に日本人の商人も居ないから、當時マカオのお高さん（本名は川口お大）とて有名なる珈琲店を訪ひて一宿を乞ふた處が、元來志士、浪人を厚遇するを以て名物となりたるお高女將の事だから、先づ何より先にお風呂を召しませと來た、裁之先生大に喜びボロ〳〵の支那服を脱ぎ捨て久しぶりに北京以來の汚垢を落して居ると、不思議や脱て居た衣服がぞろ〳〵と動き出したので女將は怪しみ能々檢すると動くも道理虱が衣服に充滿して居るので彼等は衣服と共に何處へか匍ひ行く處であつたげな。

澤村のお馬

當て正金銀行の黑幕で北京に滯在して居た澤村繁太郎は嘗て梅田章と名乘つて厦門に往來して居たが、後に臺灣總督府から何か名義を附て貰つて厦門探題の樣に成て逗留して居た際の事、忠元來太兵肥滿の澤村であるから、出ぬて先生考へ若しお末、十四の馬を買込てそれに打乘り出かける事としたが、何がさて馬の少い南方の事で、何處から引張つて來たか疲馬のヒョロ〳〵する奴に優然と打乘つたる樣は餘り好い見得でも無つたので、路傍見る者亦澤村の馬が通ると云ては話の種にして居たが、夫れても先生

得意に乘廻つては威張つて居たそうな。

紅燈會の女魁

河南省と安徽省の境なる黒牛山に立籠つたる紅燈會徒は、白蓮會の一派で女の會員が多いから、其小頭にも飛天犬だの、呉蚣虫だの、凄い名の付た女が馬上に緋の手綱を採て部下を指揮する樣は宛然たる支那小説圖中のものである、見て來た者が少いから嘘の樣だが、實際支那の會徒にはこんなのが大分ある。

膝東海の沈勇

暫く本名は云はぬが、哥老會徒の間に出入して、尤彼等の內情に通曉せる日本人某は自ら東海と名乘つて哥老會中の頭領の株を持て居る怪男子である、彼がかの漢口の唐才常事件の後、洞庭湖を廻つて常德府附近に出沒して居る時、同志の支那人と共に密議を凝して居ると、どうも思ふ通に行かないから最後の決心を示さんとて秘藏の日本刀を踏み折て兩段となし、彼條の中に投出したのには一座皆驚倒してしまつて、由來身に寸鐵を帶びざる東海こそ反て沈勇侮る可らずとして尊敬されたのである。

伊藤侯は小さい人

伊藤侯が嘗て臺灣より清國厦門迄吉野艦に搭じて乘廻つた時の事である、厦門の領事館さして上陸した伊藤・西郷・桂の三人は無論微行であつたから伊藤侯はフロックコートに西郷侯と桂伯とはフランネルの詰襟りて所謂喰逃げ帽子を冠つた儘であつた其時送迎に大騒をした領事館の雇支那人は某日本人に問つて伊藤侯は小さい人ですねと小聲で云つた彼等は李鴻章と並稱せらるる伊藤侯の風采を、恐ろしき東洋流の豪傑面だと思つて居たらしい。

泣兒と日本來

昔の所謂倭冠と云つた時代より日本人の勇猛なるは轟き渡つて居る南清海岸の事であるから、日本軍が臺灣を占領した時分、彼等が鬼とも仰ぎたる劉永福が脆くも打破れたるを聞た厦門人の間には、當時日本來と云ふ言葉が流行した、夜間に窓の戸がバタ〳〵するとそら日本來だと云へば泣兒も聲を止めたと云ふ事である、それから婦女子の間には日本來といふのが、我東京のヲヤツと驚く位の事に用ゐられ一時は非常に流行したものだ。

味噌と糞

日清戰爭の當時、威海衞を占領した我軍隊の下士が土人の家に行つて味噌を徵發せうと思つたが、さて其言葉が分らぬ、のみならず味噌と字で書て見せても矢張り分らぬので、下士殿は考一考の末『味噌は豆にて製し其狀宛かも糞の如し』と漢文で書て見せたげなが、それてやつと分つたそうだ。

山猪と山鶩

臺灣人が日本語を生囓りして片言交りに好く遣ふのに頗る面白いのがある、彼等は豚を猪と云つて野猪と區別する、然るに或時山の畑に野猪が出て芋を堀つて困ると云ふのを『ヤマブタが來る、芋タベロあります』と云つたのと、小兒が鴨の活てるのを賣に來て『大人山家鴨買は無いか』と云ふたのとは一對に可笑かつた。

加藤と上等と毛唐の間違ひ

臺灣を占領して間もなき頃の事であつた、某處の守備隊長に加藤大尉といふ人があつたが、其人の名刺を英字で綴つたのを或西洋人がキャプテン、ケトウと呼んだのてグット吹き出すのを耐へた事があつたが、是は又別の話て、商人の加藤某と云ふのに向つて

愛嬌の好い査姆（女の事、別品といふのと同じ）が大人と敬まるから、何かと聞けば『大人、加藤、ボカボン、上等好やぢやない』と加藤を下等と聞て、上等に敬ませろとの意味であつたさ。

土匪業

伊太利の皇帝エンマニエル二世が國民の職業別を作らせた時自らは帝王業であると認めさせたと云ふ話を聞いた事があるが臺灣では土匪業と云ふのが立派な一の職業となつて居る時代があつた、それは壯人が法院に差出す民刑事の訴狀に屢々被告の職業を土匪業と認めて來るのを見たからである、被告の職業を認む可しと云

はれた土匪業と書た代書人の思付き、帝王業と一對で面白いではないか。

喰人の種

野蠻社會の特性として獰猛慓悍なるは見る者聞く者の唯々戰慄する事計りであるが茲には更に彼等が如何なる程度まで殘忍酷薄なるかを紹介するであろう、南洋カロリン群島のパプアン人種、ラットム人種などは如何にも飢たる虎狼の樣な性質を有して其極度人間を喰ふことをも却て非常の手柄と心得て居るから人肉は彼等の眼に於て丸で肴と同一な者である、されば定めて仲間同士で

も喰ひ合ふかと言ふに、決して左樣ではない、大抵は部落を異にしたる彼等の隣人を捕へ來り、之を珍味として己が一部落中の會食を行ふ者である、元來彼等は一島の中に幾多の團隊を爲して相割據し居る、其團隊が或は五十人より或は七十人より成り立ち、そして各々一村を成したる姿であつて、此一村が即ち一部落といふべき者である、部落には又必ず猛獸の如き會長が居る、此會長が一方の大將軍となり、部下を率ゐて他の各部落を攻略するのである、斯樣な譯で一島中は會長が三人四人も居るから、我邦の境界爭ひの樣な小さき出來事も、彼等に取ては丁度一國とも云ふべき大天地の變戰であつて、其相斬り相屠る中には何者か遂に不幸なる御肴に供せらるゝ次第であるのだ。

會長は權利として頰肉を喰ふ

文明國に流行する强食弱肉の言語は單に形容の上に止まり、敢て人肉を喰ふ迄には至らざれ共未開地の强食弱肉は實地を以て盛んに血の雨骨の山の實況を演出し、人肉膳羞の慘劇を逞ふするのだから、是等が眞の强食弱肉の文字に當てはまるであろう、其會食の儀式が行はるゝ時には會長の膳部に先づ兩頰の肉厚ふして而かも軟かなる部分が供へられ、副長組長等は之に次て各々股腕のうち身を喰ふ樣だ、又其雜卒等に至りては、何處でも搆はず刃の當るを幸ひ、滅多矢鱈にそぎ取り斬り離し、我れ先きに亂暴に喰ふ

のてある、其狀態を獸的といふよりも尙數層恐るべき有樣てあつて、地獄の惡鬼の飯時ても之に過る殘酷はヨモあるまいと思はれる程だ、彼等は固より獰猛なる特性を有すといへども、其處は又酋長の命令次第て、時には婦女にも劣つた丸て元氣なしの者とも なるし、殺せといへば人斬庖丁を振り廻して向ふ處敵なき位の勇氣をも顯はす、併し彼等は一個人の資格て以て勝手に人を殺す樣な場合は極々少ない、去れば一人の敵を捕ふる時は先づ之を島主酋長の手許に連れ行き、而して其裁判的宣告を請ふのてある、此宣告こそ捕虜の爲には將に生死の分るゝ一殺那とも言ふべき危機てある、斯んな危險な場合てあるから、從來本邦人等が交易の爲めに無暗に其處等へ上陸せんとして、不意に身邊へ庖丁が飛び來

り忽ち首と體とが二つになつた例が澤山ある、乍併永年交際の路を開き物品の交換もなしたる位の島民は、本邦人に向ふては決してソー無暗に殺す樣な事はしない、唯日本人とも何とも識別する智慧のない土人て一回も交易した事のない所にても上陸した者なら、餘程注意して先方の氣を取失はぬ樣にせぬと、夫れが即ち此世の暇乞ひにならぬとも限られぬ。

樹上の放糞

コイツは未だ世人に耳新らしき話しだろうと思ふ、彼等は實に面白い工夫をして大便をするのてある、余は施行中往々土人が樹木

に登り其處に腰打ち掛て居るのを發見した事があるから、始めは只單に涼むでゝも居ることゝ思ふて別に深く研究を加へなかつた然るに後にて聞けば彼等の樹に上り居るのは多く大便をなす爲めなので、其木の枝の股に當る所が丁度踏臺に充てられて居るのだと云ふ事だ、シテ見ると此木の股は天然的ではあるが、恰も人工を以て態々彼等の爲めに設けられた樣な者だ、其處に踞る彼等と云つたら、何の事はない毫も木の上の猿に異ならぬ夫れは何處の木でも必ずさうだと云ふ事はないが、下に一條の川があつて樹枝が川に差かゝり、然して枝が股になつてさへ居れば、其處は大概彼等の便所と見て差支はない婦人も男も總て此等の事には一向頓着のないもので、其の平氣な處は風俗として決して怪しむに足ら

ぬとしても、風下を通る我等外國人は、ピチ〳〵ポチヤ〳〵の音を聞いてイカデ驚かずに居らるべき、マダ其上に其臭い香か紛々として鼻を衝き來るに至つては、最早閉口頓首の極點で、樹の下枝の葉の上に俄かに山吹の花を咲せる所など、殺風景も此處迄來れば却つて滑稽の方に近い、此外時として共同便所の如き大青廁を設けたる部落もあるが、是は必ず何もなく水も流れ居らざる處に多い、凡て人口多き蠻人の部落では、人の集る朝毎に青廁が則ち彼等の爲の集會所とも言ふべきもので、放糞し乍ら各々互に雜談する所の狀は、恰かも我國に於ける井戸端會議と好一對である、別に極り切つた日々の要事も無き樂國とは云ひながら、則の中で毎朝長時の談話とは、イヤハヤきたない風俗も世にはあればある

ものだ。

土人の弓漁

彼等の漁業は凡て弓を用ゐて巧みに漁獲するのである、島人は元來釣針等を用ゐて漁するの道を知らぬ、本邦人は針を用ゐて漁する譯だから魚の見ゆる所も見えない處も、釣るには何の關係がない、然るに彼等は弓を以て射る譯であるから、魚の浮き上つた際にあらざれば、夫れの應用が出來ぬ、今茲に土人の漁る方法を陳ぶるであらう、弓は我國の如き上等の弓ではなく、竹や樹枝を引き曲げて弓形となし、矢は樹枝或は竹を以て之に充て其尖先には貝及び魚骨を之に挿み、然して其カヽリの處に魚齒或は貝等を逆に結びつけ、矢尻には一條の糸を附着し、豫め其糸を自身の腕に卷付け置くのだ、かくして矢を放つ時は、矢に從つて糸はズル〳〵と腕より繰り出る仕掛になつて居る、コンナ汪遠な仕掛で以て鳥でも魚でも自由自在に射取るに至つては、實に不思議と云ふより外はない、勿論彼等の用ゆる弓は粗末なる者ではあれども、其技術に至つては百發百中、一として外るゝといふことはない、養由基の弓勢も恐らく之に過ぎはせまいと思はれる、ソコデ射當てた時には彼等は直ちに其糸を引いて之をたぐり込み、魚を引張りよせて捕獲するのである、尙詳く其射法を說明すれば、右手の腕の處に糸を掛け、射放つ時に糸の手先に纏はざる樣卷き掛けて